

異種百人一首叢刊(四)

—本歌をなし・百人一首もじり十一種—

伊藤嘉夫

異種百人一首は、小倉百人一首に対する異種という意味で名づけられたものである。すなわち小倉百人一首が、百人の各人の一首づつを集めたあわせて百首のものであったのに倣って、各人一首、百人であわせて百首に撰んだものを云うのであり、それが次々に撰ばれて、世に行われたものが多く、これらを異種百人一首と称したものである。

最も古いものは、伝二条良基(一三二〇—一八六)の撰といわれる「後撰百人一首」があるが、文化年間に上梓されるまで、世に顕れることがなかったのと、その内容についても疑わしい点などあって、偽書説があるのでしばらくおき、常徳院足利義尚の撰で、文明十五(一四八四)年成立、明暦三(一六五七)年刊の「新百人一首」は、写本もあり、その伝来は信じられるもので、異種百人一首で伝わるものの最古のものとして云えよう。また天文二十(一五五一)年江州観音城、武備百人一首」と称するものは、上梓されたことはないが、転写の一本が跡見学園にあり、その全文はすでに翻刻紹介したものである。さらに「武家百人一首」も、寛文六年

の刊本の奥に、「万治庚子(一六六〇)仲冬」の年次が記されておるのに、尾崎雅嘉はその著群書一覽にこの撰者を、姫路侯榊原忠次であると云って居るのは誤である。万治の頃、(一六六〇)は姫路侯榊原忠次(一七三二—一九三)はまだ生れていない。これは、おそらくは榊原忠次が、武家百人一首に註をつけたのを誤ったものと思われる。とにかく、その他の理由もあるが、武家百人一首は江戸以前、室町時代に撰ばれたものと思われる。この様に、室町時代に、これらの外にも異種百人一首は撰び行われたものと思われる。明暦、寛文の頃には刊本としても少くとも二種類、ことに武家百人一首などは、寛文六年、同十二年、元禄十六年と、板元をかえながら重板を上梓している。よほど行われたものと思われる。

この様にして、異種百人一首が行われたのであるが、一方小倉百人一首は、庶民の中に広く流布して、歌学の家秘伝の中にだけとどまるものでなくなつて行つた。

小倉百人一首が、歌の家の宝蔵から出て、庶民の中にひろめられて行くにつれて、各の歌が

歌意だけを伝えるのではなく、むしろその歌意からはなれた音声としての、音誦の中に生れる語呂への親しみを生むようになっていくのであつた。「ちはやふる神代もきかず……」の歌から、小咄を生み、落語を生んだのもその語呂から来るものであつた。語呂から派生するおもしろ味に、庶民の笑いがあつた。

神社仏閣江戸名所百人一首、一冊、画工近藤助五郎清春筆并作として、人形町通りひらのや刊。国書総目録によれば、寛文三年の刊といふ本がある。「本歌なをし」と表紙に註書きをしている。本歌とは小倉百人一首の歌であり、それを本歌取りならぬ本歌なおしをしたといふのである。

秋の田を刈り、ほすいねのひまを、ゑらみ六あみだへぞまいりゆきつ、
天智天皇

と云つたものである。、のあたりに語呂のひびきあいがある。「六阿弥陀」の名所を出し、刈り入れと六阿弥陀の図を出す。こういったものへの関心は、世の泰平に入ると共に庶民の中に浸みて行つた。類似のものの発生を見ることが出来る。寛文三年の「江戸名所百人一首」に

つづいて、寛文九年には、「犬百人一首」の刊行を見ることが出来る。歯双庵撰という。第一首をかゝげる

あきれたのかれこれ困暮のともをあつめわが
だまし手はつひに知れつつ 鈍智てんほう

まことにふざけたものである。作者まで語呂にこねまわしている。こうして、百人の作者の歌を一人で詠んだものであって、前にあげた異種百人一首は、ともかくにも百人の一首づつをあわせての百首であったのを、これは百人の分なのであるが、あくまで、小倉百人一首をうしろにおいての歌であるところがちがうのである。斯ういう系列は、明治に入るまでずっと続いていることが出来る。

近藤助五郎清春は、寛文三年の江戸名所百人一首が、世に迎えられたのに気をよくしてか、享保年間にかけて「今様職人尽百人一首」「道化百人一首」を続刊している。

軒のいたかりほぞあなののみをえらみわがで
しどもはせいをだしつつ 天智天皇

秋の田のかりほすまでにひよりよくわがごと
もらをらくにすぎさむ 天智天皇

これらは、江戸名所百人一首と全く同様な形式で漫画風な絵を書き、会話を書きこんでいる。

「どうけ百人一首」には「本うたなをし」と傍注している。「どうけ百人一首」は、その後、題名内容ほとんど変ず、挿し画だけかえて、十種類以上のものが行われている。いまは、六種の異版をば校合しつつ、近藤本とちがった詞句

のあるものを出して一本にした「校合どうけ百人一首」を出す。

次に、「本歌なをし」ではなく、初句または初二句を襲い、又は四五句(下句)をそのまま出して、小倉百人一首の作者をかかげ、別歌に詠み出したもの二種を出す。一は、「絵本芝居百人一首」、一は、「絵本狂歌百人一首闇夜磔」である。

吸ひものをこぼした人の気のどくさわが衣手
はつゆにぬれつつ(芝居) 天智天皇

秋の野に草ふみわけてかる虫にわが衣手はつ
ゆにぬれつつ(闇夜磔) 天智天皇

次に、「男女教訓百人一首宝蔵」は、撰者不明の天明七(一七八七)年刊のもの、庶民の義理、倫理を、小倉百人一首の歌と人をたつきに詠んだもの、「おかげまゐり百人一首」は、伊勢神宮へのぬけまいりの歌、東西のを出す。

百人一首地口画手本は、お祭の燈籠などに絵を書き、それに歌を書く、「地口あんどん」の虎の巻といったもの、庶民の中に入っていた百人一首なのである。

江戸末期に至つての道戯百人一首、まだまだ寛文のなごりはあるが、ずい分に移りかわりは見られる。

しめくくり、太田蜀山人南歌の狂歌百人一首を掲げる。さすがに達詠であるが、道綱の母を 道綱朝臣などと出しているのは、わざとの悪ふざけでもなからう。訂しておいた。

最後に、収めた異種百人一首を列記する。
1 江戸名所百人一首 近藤清春撰(一六六三)

2 犬百人一首 歯双庵撰(一六六九)

3 今様職人尽百人一首 近藤清春撰(享保年間)

4 どうけ百人一首 同 (同)

5 道化芝居百人一首 諫鼓尾佐丸撰(不明)

6 狂歌百人一首 闇夜磔 鱗齊一鱸撰(一八二六)

7 校合道化百人一首 山東京伝撰(一七九〇)

8 百人一首宝蔵 撰者不詳 (一七八七)

9 おかげまゐり百人一首 同 (一八二九)

10 百人一首地口手本 松齊芳宗画(一八五二)

11 狂歌百人一首 太田南歌詠(一八四三)

以上十一種である。このうち、蜀山人の「狂歌百人一首」をのぞいた十種は、いづれも小倉百人一首の歌を下において、その語呂をうけてもじったもので、「もじり」、もしくは「本歌なをし」と云っている。前に述べたように、近藤助五郎清春の「江戸名所百人一首」を宗として引きつづきその様式をつづけて「今様職人尽」「どうけ」の二種を作ったが、所謂、もじり、本歌なをしの系譜を作るもので、これを引きついだものは江戸時代から明治に及んでいる。も一つのもじり様式には、小倉百人一首の本歌の一句または二句を踏襲して、全く別歌とするもの一系統がある。これは、「犬百人一首」を祖とするもので、ここに収めるものでは「道化絵本」「闇夜磔」は共に、下の句を同じものをういて別歌としている。前に翻刻した「花くらべ」は上の初句、初二句、初二三句を用いて別歌としている。斯うしたもじりの歌の一系統がある。「花くらべ」は作者を仮に出しているが、一人の作者の代作である。

江戸名所百人一首

近藤 清春 筆作
寛文三(一六六三)年刊

- 1 秋の田をかりほす稲のひまを選み六阿弥陀へぞまいり行つ つ 天智 天皇
- 2 春過ぎて夏来にけらし亀井戸の藤のさかりにあまたまくうつ 持統 天皇
- 3 あし曳の山さかみちの雜司ヶ谷妙法利益人もねがはむ 柿本 人麿
- 4 たれの氏子打ちつれ参る駒込の富士梵天を子共あげつ つ 山辺 赤人
- 5 奥山にもみぢさきわけかいぜんじといゆく人も見ては楽しむ 猿丸 太夫
- 6 鴨鷺のむれるはたはべんてんの不忍みれば氣もはれにけり 中納言家持
- 7 愛宕山見上げてみればかすかなるあの坂のぼるみへし人かほ 安部 仲麿
- 8 わが庵はお江戸のたつみ五つ目の世にらかん寺と人はいふなり 喜撰 法師
- 9 花のころは盛りにつけりな上野山わが身弁当をひらきせしまに 小野 小町
- 10 これやこの色も菩提の觀世音知るも知らぬも浅草の寺 蝉 丸
- 11 ふだのばこ谷中じかけてとみつかんと人みなつめるあのやかんのうし 参議 篁
- 12 あまつかぜ氏子神田の大明神乙女の神樂しばしながめん 僧正 遍昭
- 13 つく鐘の未來たすかる増上寺これぞざとりてごぜとなりける 陽 成院
- 14 陸奥のごぶく餅売る誰もみな目黒みやげにわ

異種百人一首叢刊(四)

- 15 さきし梅春の野がけに臥竜梅わが心での歌をよみつ つ 河原左大臣 光孝 天皇
- 16 立ちわかれ池上山の信者多くまたつれあらばいさまるこむ 中納言行平
- 17 鈴やふる神の教へのしんたくの妙義さまへとゆみあぐるとは 在原 業平
- 18 すぎし世の石にほる名の泉岳寺昔ものの人もほむらむ 藤原敏行朝臣
- 19 なにとかく土産に我もふのやきをくうてこの子がまいる天神 伊 勢
- 20 とひぬればみつまたおなじ聖天のよねまんぢうをくはむとぞ思ふ 元良 親王
- 21 今こんとつきしななつの長談義あとやさきやとかへるれいがん 素性 法師
- 22 深川のあのやすさき色みればまづ弁天へまゐるといふらん 文屋 康秀
- 23 月みればでに札こそかはりけれ我身一人にあたるごこくじ 大江 千里
- 24 此たびはぬしもともづれに誘ひあひ染井のにしき花のかずかず 菅 家
- 25 なにとおぼはあふ坂下のほりかね井人に知られてみるよしもがな 三条右大臣
- 26 上野山まいる大しにねがいあらば今一たびのみくじまたなん 貞 信 公
- 27 桜ばばわけてのらるるかけじみらいつみるとてもはげしかるらむ 中納言兼輔
- 28 あまざげはうるでとうとくまさりけり人みなうばへあげるとおもへば 源宗干胡臣
- 29 こどもはれにあぐるやのぼり初午のこうとく

- 30 寺こそしんぜんのはな 九河内躬恒
- 31 浅草のみだうはひがしごもんぜきあさちまるりはよきつれぞかし 壬生 忠岑
- 32 あさぢがけ有がたのつきぢごもんぜき西の御だうのみゆるしらくも 坂上 是則
- 33 山上にしでのかけたる神木は名だいてもあさぶ一本松なり 春道 列樹
- 34 久方の光かがやく御やしるのねづこもなきけいきなるらむ 紀 友 則
- 35 誰もかもしる人もせん道くわんの山もむかしの城あともあるに 藤原 興風
- 36 人もいざこも八まんふるさとのあなぞむかしのかみやどりける 紀 貫 之
- 37 夏の夜はまだよひながら両国の橋のすずみの人もにぎはふ 清原深養父
- 38 神明にかみのみさきの天照らすつらぬきあぐる玉のみかぐら 文屋 朝康
- 39 おがまるるみればをそろし大王の人の悪事をすくひたまふは 右 近
- 40 あさち原にはの芝はらそうせん寺まゐりてなどやつれの恋しき 参議 等
- 41 しのぶれどいと出かけるこのみちはにほんつつみと人のいふまで 平 兼盛
- 42 世をすててその名は久米の平内と人しりてこそねがひかけしか 壬生 忠見
- 43 ちぎりきなかたみにあふぎ残しつ鏡が池に身をなげしとは 清原 元輔
- 44 われみるもきくにごわうのみ薬は王子へいなりつかさなりけり 権中納言敦忠
- 45 あふことのただのやくしは中々にねがひし

よぐわんもききしざらまし 中納言朝忠

きの月をみしかな

赤染衛門

いせいであがらんと思ふ

源俊頼朝臣

45 あはれともとふべき人は老いぼれて身の無縁

60 大屋様いくへの願はともかくもまだふみばこ

75 まいりおきしさせもがぐわんをいささこのあ

寺となりぬべきかな 謙徳公

の地藏菩薩へ

小式部内侍

76 ちよきの舟のり出みればいさみよく雲居にま

46 ゆしまなをまゐるみな人天神へ文字もしらぬ

61 いにしへの名のみ渋谷の武者桜今こんんわう

伊勢 大輔

77 歯をなやみまいりせかるる白山のやうじしよ

ふでの道かな 曾根好忠

といひしぬるかな

清少納言

78 牛しまにかよふちとせのみ社とおなじあきは

47 やへむぐらふけ行かねのさびしきは人こそみ

62 夜をこめて鳥のそら音はあかすともよにあふ

79 吹く風にため池水の岸によりむれいづるかを

えねどてのどうてつ 恵慶法師

客のつとめゆるさじ

権中納言定頼

80 長からん心の願をくまがへのみやゐにけさは

48 ゆみをいためいまいるやさき三十の三間堂を

63 今はただ一のごんげんとばかりにてあかざだ

81 ほどとほく三の輪のかたをながむればただ天

とほす武士かな 源重之

うとはいふよしもがな

左京大夫道雅

82 おがみらいきてもいちがへ八まんのまゐりた

49 ときしもり江戸見坂こそ世にはきこえみるに

64 あさくさの氏子三社へそれぞれのあぐるえん

83 世の人も道こそしらね五百騎を今戸はしばで

はれつつよきけいとこそみへ 大中臣能宣

まの施主のあて名に

相 摸

84 なからへばまたこのごろやまゐりみむうしの

50 おやのためおのてるさきの明神はながきらい

65 うらの網干さぬひまさへなきものをここも佃

85 夜もすがら花見のころはにぎはうて行きかふ

せをいのりけるかな 藤原義孝

の身こそうきけれ

前大僧正行尊

86 いのれとてぼだいは物とほうせんじかけしが

51 がくとだにみればあかぎの御神をさしもしら

66 もろともにあはれと思へ梅若のはるよりほか

87 むさしごうつなまもりの御ほぞんは世にた

ずにいのらざりしを 藤原実方朝臣

にしる人もなし

周防内侍

88 なにぞとのあれのこれのと人めゆへ身をつく

52 わけゆけばくる物とはしるがねのなをとを

67 春の夜の夢のつげなるたこ薬師かひなくぬけ

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

みちの祐天寺かな 藤原道信朝臣

しこそちちけれ

三条院

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

53 なげきつつひとりねる夜つまごひはいなり

68 所をもしらでうし田の御薬師をとひしかねた

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

りせうのつまとかはしる 右大将道綱母

るあぜの道かな

能因法師

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

54 わすれじの行すゑたのめ観世音けふをかかさ

69 あらし吹くみめぐり山の木の葉ちりみやと川

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

ぬせいすいじかな 儀同三司母

こそけいきなりけり

良暹法師

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

55 たけの名をばたへで久しき相生の名こそなり

70 さびしさに谷中立出てななおもていつも法華

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

平なをも天神 大納言公任

経のあのや御祈禱

大納言径信

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

56 あらたなる此の世の外はらい世までいまぞお

71 夕ざればこまがただうに人しげくあれのこれ

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

たびのやくし如来を 和泉式部

のとのりあひをせて

祐子内親王家紀伊

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

57 めじろまへで見しやそれぞと休む茶屋日もく

72 音にきくたかしのむねの聖堂は学者はそれに

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

れぬまに酔うたつれかな 紫式部

儒道講釈

権中納言ただふさ

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

58 有がたのみなも山王へわけゆけば行くる人を

73 大久保のゑもんの桜さきにけりとまりて人も

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

まちてとほしつ 大貳三位

ただずもながめん

皇嘉門院別当

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

59 やすからでひまなきものをさそひきて霞がせ

74 うかりけるこゑをちからのくるまざかはげむ

89 かねのをよあげなばあげよながびくなりせう

のことも四谷天王

式子内親王

90 見せたやなおしまのあまがぐわんだにもねが

ひぞききし目赤不動へ 殷富門院大輔

91 きりきりとまくや四つ谷の七おもてこもさ

かりと人も花見む 後京極撰政太政大臣

92 わがなじみしほひにみえぬおきの色の人こそ

しらねかよふ品川 二条院讀岐

93 世の中よ舟にもれのやなぐさみに網のほし場

につれてゆきしも 鎌倉右大臣

94 みきしののやすみかばやきさけうけて深川と

へばここぞ八まん 参議 雅経

95 おほほなくうき世の人もかうしんへわがたか

なわの太子堂こそ 前大僧正慈円

96 人さそふやなかのすわの八景を見にゆく人も

げにといふなり 入道前太政大臣

97 来ぬ人を待ちてやうしの天神をいのりしや

うの身も小石川 権中納言定家

98 あせそよぐあざぶひ川の明神は宮居ぞ守護の

しゆせうなりけり 従二位家隆

99 人にきき夢ぞ下谷の明神の世に鳥越とまづい

のる身は 後鳥羽院

100 百敷やふるきみ寺やきね川のなほ有がたきや

くしなりけり 順徳院

〔解説〕題簽、神社仏閣(ツノ書円でかこむ)

江戸名所百人一首、えどめいしよ、画工近藤清春筆。人形町通丸平、ひらのや。本歌なをしとあり。二十五丁、各丁四人、一面上下に分つて、二人。名所絵を出す。人物と語を配す。例えは最初の天智天皇は「六あみだ」と肩に書き、人物五人を配し、稲刈りと六阿弥陀参り

を出す。言葉を出す。これは、正しくは百人一首ではなく、近藤氏による「本歌直し」、つまり小倉百人一首の歌をもじって、江戸名所を詠んだ狂歌である。

六あみだ、かめいどの天神、雑司谷鬼子母神駒込富士権げん、かいせん寺、不忍弁才天、愛宕山、五百羅漢、上野山、浅草寺観世音、谷中かんのう寺、神田明神、増上寺、目黒不動、梅屋敷、池上本門寺、亀井戸めうぎ山、高輪泉岳寺、麴町平川天神、金亀山聖天宮、れいがん寺、州崎の弁才天、護国寺、染井、牛込逢坂掘りかねの井、元三大師、本郷桜の馬場、浅草うばが池、こうとく寺稲荷、浅草御門跡、築地御門跡、麻布一本松、根津権現、道灌山、穴八幡、両国橋、芝飯倉神明、浅草えんま堂、浅茅原そうせん寺、日本堤、観音地内糸平内、妙義山鏡池、王子稲荷、牛島ただの薬師、無縁回向院、湯島天神、土手の道鉄、三十三間堂、江戸み坂坂本おのてる明神、あつぎ大明神、祐天寺、妻恋の稲荷、浅草せいすい寺、業平天神、茅場町薬師如来、目白不動、山王大権現、霞ヶ関、観音寺中文箱地藏、渋谷のこん王桜、吉原、一の権現、三社権現、つくだ島、すみだ川、目黒たこやくし、うし田の薬師、みめぐりの稲荷、谷中七おもて、こま形堂、聖堂、柏木のあもん桜車坂、魚籠の観音、石原椎の木、白山、千歳の稲荷秋葉権現、溜池、熊谷安左衛門、三輪の天王、市ヶ谷八幡宮、いほさき、牛御前、びやうぶ坂、ほう仙寺石地藏、三田八幡、小石川つくど明神、四つ谷天王、駒込目赤不動、四谷七

おもて、品川汐干、深川網ほし場、深川八幡、高輪庚申堂、谷中すわ明神、小石川牛天神、ひ川大明神、鳥越の明神、きね川の薬師、以上百名所である。

寛文頃の名所のあった場所が知られる。神社仏閣で、その後火災などで移転したもの、あるいは焼亡してしまつたものなどもある。五丁の裏、十丁の裏、十五丁裏、二十五丁裏の画のすみに、各「画工近藤助五郎清春筆」と細長くくぎり彫り込んである。すなわち、画も、歌も清春の作としている。神社仏閣の名所案内の図をかかげ、小倉百人一首の歌の句をもじりつつ、いわゆる「本うた直し」によって、名所の風情を出すようにしている。小倉百人一首をもじつたものとしては、刊年のあきらかなものとしては最も古いもの一つである。なおこの本歌なをしによる百人一首は評判がよかつたものとみえて、同じく清春の作として、後に収める「本うたなをしどうけ百人一首」、「今様職人尽百人一首」は、共にひろく世に行われたものである。

江戸名所図絵などと対照したり、現在移転したものなどを比較して、文化史的意味をも持つものである。現在でも、亀戸天神、雑司谷鬼子母神、不忍弁才天、上野山、浅草観世音、増上寺、池上本門寺、護国寺、回向院、湯島天神、牛御前、深川八幡、穴八幡、祐天寺、駒込富士権現、神田明神など三百余年をへて今日なほ親しまれている名所が多いのに、信仰の根強さも思われるのである。

犬百人一首

齒 双 庵 撰
寛文九(一六九)年刊

- 1 あぎれたのかれこれ囲碁の友をあつめ我がだ
まし手は終に知れつつ 鈍智てんほう
- 2 はり過てなくれにけらし白ふくに衣着るてふ
尼のなりさま 女郎てんじん
- 3 あしき木のもきとりの此すたり物ながながら
柿ひとつかはなん 柿売人のぬき
- 4 薪うりに打出てみればしらうとの買へる高値
に欲ははりつつ 山辺 商人あまひと
- 5 奥様に拍子ふみ分け一曲の声きける時ぞ銭や
かねじき 猿若太夫
- 6 かかが身の沙汰せる恥にあく顔のしろきをみ
れば氣ぞつきにける 忠右衛門かかもち
- 7 飴の腹味はひ見れば味がないいなりの山にこ
ねし土かも 飴の中買ひ
- 8 我が腹はたつるにいたみしかとする世をうち
針と人は云ふなり 氣積しやう 法師
- 9 仮名のいろはさがりにけりな文つらに我が身
絵にふれうかめせしまに 鹿野の小まん
- 10 これ小哥聞くもうたふも若衆は知るもしらぬ
も大酒の席 千 松
- 11 あの野ばら此の島かけて咲き出ぬと床には活
けよ花の釣舟 しんき高ぶり
- 12 且那風質屋のかよひぢ吹きとぢよこぶくめの
姿しばしとどめむ 僧正 貧僧
- 13 煩ひにみな肉おちし身骨皮肥ぞつものてふと
く成ける 養生院
- 14 銭金をしのぶたこずり何ゆゑに見られそめに
- 15 舞ならなくに 河原の舞太夫
主のため晴の供に出て草履とる我が衣手に土
は落ちつつ 奉公 伝蔵
- 16 立ちわかる鞠場のあちのすみに生ふる松とし
きけば沓の音とん 中納言ひらおもて
- 17 すはやとる闇夜もきかざつたものから瓜畠
中くるるとは 瓜原なりひらいの朝臣
- 18 富士行の法によるの身はるものや旅のかよひ
ぢ人目よからむ 富士行者年詣朝臣
- 19 所帯がたみじかきあしの爪ほどもふみしめて
世はしかくてよとや いちや
- 20 あびぬれば湯に肌をなで柔和なる身を洗ひて
もあらむとぞ思ふ 眉目よしの聳
- 21 御訴訟といひしばかりの長縁に埒明の殿を待
ち出でつるかな 訴訟 法師
- 22 売るからに草双紙でも安ければむべかふ人の
うれしいといふらむ 本屋 安売
- 23 ねてみれば度々に耳こそすましかれわが目一
つの夜にはあらねど 大寝の夜聴
- 24 度々は医者もとりあへずたはけやまひもちひ
の持葉あひ問あひまた 疝 氣
- 25 名をとらば大高声の修羅鬘人に知られた諷と
もがな 三条の謡うたひ
- 26 富士の山唐の者ども心あらば今ひと旅の深雪
めでなん 唐人 公
- 27 いかい腹あきて泣かるるいつもいつもいつ麦
めしが恋しかるらむ 中間 勘助
- 28 やまひものはひえぞくるしさまさりける人目
もかさもはれぬと思へば 源胸痛朝臣
- 29 心あてにをらばやをらむふれる粉のつきまど
- 30 ある酒につれなくしひし亭主より赤づらばか
りうき物はなし 壬生 只寝
- 31 朝出てありたけの銭のなきまでに吉野の遊山
くらす籠のり 坂上の籠のり
- 32 あつかはに顔はらしたる賤が身は人ともあは
ぬ慢じ也けり 張肱馬鹿頰
- 33 おやかたの叱りくどきに晴の日に何ごころな
くはなのたるらむ 此の供の者
- 34 誰かにも大平にせん高ぶりのやつも我身の主
ならなくに 武士童の殿風
- 35 人は医者心もちとふふりぐすり疵ぞおかしの
香に匂ひける 火のつらやけ
- 36 くすり箱はまだ宵ながらあけぬるを小者いづ
こにつるふせるらむ 氣よはりの藪薬師
- 37 しる粉に風の吹きしく見せ棚はちらめきとめ
ぬごみぞたちける 粉屋の朝ねし
- 38 破らるる身をば思はずしめてしてふたのゆも
じの惜しくもあるかな おかん
- 39 朝ゆふに檜物士のわれ仕なぶれどあまりにな
どか下手のかいしき ちやんげ檜物士
- 40 死を見れど色に出でにけり我欲は物やほしき
と人のとふまで 寺の墓守
- 41 悔捨てやふわかげには名も立ちにけり人づれ
にこそ遊びそめしか 壬生 只居
- 42 けづりきなかた木に袖をすりこすりすぐの松
の木ゆがませじとは 番匠童の又介
- 43 あびみての水をばのちにくらぶれば昔は手足
ほめかぎりけり 権中納言あつやみ
- 44 おふものの絶えてしなくば中々にせつく人を

- もうらみざらまし 中納言あさまし
45 あはれともいふべき道はしらずして身の馬鹿
づらになりぬべきかな 慳 貪 公
46 世間をばわたる皆人中をたえ道理もしらぬ我
がころかな すねのえせただ
47 若ものらしげれる宿のいみじきに人こそくす
めういて来にけり 浮ぶ法師
48 疵を痛み敵の手なみにをのが身のきられて物
を思ふころかな 源にげゆき
49 身かきさすり寝てのはだかの夜はひえて昼は
ほえつつ物をこそ思へ お腹痛み薬吞朝臣
50 うらぬ時ほしがらざりし利分さへ高くもがな
と思ひぬるかな ふうりの物高
51 客とだにいへばいふ気のさしつ事さしも汁た
きもゆる加減を 殿原の亭主かたの朝臣
52 はへぬればぬくる物とはしりながら猶うらめ
しき長ほう毛かな 藤原髭のぶ朝臣
53 なくれつつ独ぬる夜のある日はいかに気の
せく物にかほあらふ 歌うたひ道者母
54 本腹のやまひの末はかたければ炙をかぎりの
命ともかな 医道三知祖母
55 滝呑はたべて久しくなりぬれど酒ぞ流れて名
は聞えける 大上戸金蔵
56 あられなき子持の外のおもひ出に今一たびの
風流もがな 和泉屋おせき
57 せりあひてみしやむりともわかぬまにひほ
ぐれせきよわる負かな 無利数奇おきく
58 ひがし山あそぶ笹原身はふけどいでそよ人の
花車なやはある 内裏おさん
59 やすらはで寝なましものを酒うけてかたぶく
までの樽を見しかな 赤づらのおまん
60 お湯の山いくとて道の遠ければまたふみださ
ずまづは毒だて 腰氣身内室
61 煮物は奈良の土産の八重一重けふここ許に匂
ひぬるかな 傾城 太夫
62 身をほめていふそらごとにはかるとも世にあ
るさかし人は許さじ せんしやうおげん
63 今は只小舞絶えなんとばかりに人だめにして
いひ教ゆかな 隠居能太夫いちまま
64 ぶらりぶらり宇治の川狩たれたれもあそんで
わたる人のあぢな氣 権十郎沙汰よき
65 売れず佗ほさぬ鮎だにある物を塩にくちなん
名こそをしけれ 嗟哉おみつ
66 丸裸哀れと思へ寒垢離は鼻よりほかにする
物なし 大粗相行人
67 暗の夜の婦ばかりなる小枕に髪うすからむ名
こそをしけれ ず坊の内儀
68 苦勞にもあらでうく世にながらへりやこれ然
るべき夜の月見かな 繁昌の院
69 あそびうくお室の山の紅葉見は桂の川の月見
なりけり 能なし法師
70 ともしきに宿を立ち出でてたづぬれば円山も
おなじ客の金くれ 靈山 法師
71 夕されば門出の舟路音ふれてあらし波間に大
風ぞ吹く だいたん常の氣
72 音をきく尿しのばのきたなきにかけじや袖
のよごれこそすれ 養子大事の家のお乳
73 だだくさの庭のさくらの咲きにけりわが目の
霞立たずもあらなん 権中納言ただくさ
74 うきやりける人ははづさん知音ぶりよ是れ然
りとはつのらぬものを いな者の年寄朝臣
75 値切りおきしさしもの質を命にてあはれ今年
の極もすぐめり 不自由物なし
76 京の町つい出て見ればけさ笠の曇りに向ふそ
れも人波 法性寺笠売時冥輕薄大氣大吉
77 背をくぐめ嫁にせかるる親子中のわれても末
になほらんとぞ思ふ 舅 む ん
78 あはれ至極加様利とりの商人のいく借銀をす
めぬ先無利 皆さまのかねかり
79 薄の衣裳きらめく雲の絶間よりもれ出る地の
色のさやけさ 歌舞伎太夫うきすけ
80 長からむ心はもたずしら紙のすかさでいつも
物をこそいへ 短氣者院のおふり
81 古狐啼きつる方をながむればただ赤飯のわけ
ぞ残れる 有徳大福左大臣
82 米におび扱も後生はあるものをうきに絶えぬ
は阿弥陀なりけり 道心法師
83 世の中よ餅こそよけれ思ひ入る山の奥にも茶
屋ぞあるなる 広太物食の太夫損せふ
84 ながらへば又子の子もや忍ばれんよしとみし
予ぞ人はほめてき 藤原器用介子孫
85 夜もすがら後世思ふことは絶えやらで部屋
の我がなみだかな 信よひ法師
86 あがけとて酒やは物にくるはする酔泣きがほ
の我がなみだかな 酔狂法師
87 酔ざめの時宜もまだひぬ酒の場に茶はたて出
さずいやの湯をくれ 茶くれぬ法師
88 何か絵の芦のかれ葉の一もとに気をつくして
や染めわたるべき 紺搔者院のばいた
89 手間の値にとへならとへねはからへば仕なく

る事のごわりもぞする 職人内儀

90 見せばやなおしはの尼の小袖だにもくれかぞ
くれし物はをします 隠居者院妙祐

91 すりきりすなくて霜夜の寒いのに着物かり出
し人めよくせん お狂骨せんしやう太政大臣

92 わがたては塩路に見ゆる海士乙女の人こそほ
めねかつぎぶりよし 二条通りおすぎ

93 世の中は銭金もがもな泣き号びあまりおほね
のたたでかなしも 釜屋右衛門

94 さんおきのやどの秋風さよ吹けてとふ人さむ
く横手うつ也 筭おきまさあい

95 寛えなくうく世の席にあそぶかな我がのむ酒
にしみぞめの袖 酒大僧正自慢

96 はなさせぬたらしの意気の君ならでふりうく
物は徳利なりけり 入道酒大上戸大臣

97 来ぬ客をまつぼの茶だすお数寄屋にやする火
はしの身もうかれつつ 御忠功茶道

98 風いとひまるのおかわの用意してむさげぞ老
のしるしやける おぢい古流

99 下手もうし下手もうらめしあぢきなく名を思
ふゆへに物思ふ身は 後藤院

100 物数奇やふるきねごろのおしきにも猶あまり
あるお菓子なりけり 潤沢院

〔解説〕「犬百人一首」大本一冊。齒双庵撰、
寛文九巳西歳中夏上旬刊。別名狂歌絵本犬百人

一首・狂詠犬百人一首。五十一丁。小倉百人一
首の、作者の語呂を合せた擬名を出し、歌は、

「本歌直し」狂歌。一面一人。歌にちなんだ押
し絵を出す。後の一丁に跋あり。

陶家の琴は弦なけれども、其声いたれり。小

林の笛は穴あらざれどもその音遠し。かの小
倉の隠士は百首の色紙をひそかにえらぶとい
へども、其音其声あらはるるごとし。爰に賀
近山荘の句を狂詠に翻転して笑のたねをまく
は、瓜の終になりたるを見てこれを味はふ人
ひいやりとせずといふ事なし。誠に此道に年
久しくなれなれ茄子のへたのおよぶへきとこ
ろにはあらざる作り物なり。

それのとしの其日、蝸貝室の雨だれに筆を
ぬらし侍る 齒双庵

寛文九巳西歳中夏上旬

とある。これを大正八年七月、稀書複製会の複
製本、印行三百部の内二四八という袋綴本を底
本とした。

犬百人一首は、もじり歌としては古いもので
ある。この時代の「武家百人一首」、「新百人一
首」などが行われ、百人一首が、庶民の中によ
うやくもてはやされようとした機運の中で出版
されたものである。泰平のムードの中に行われ
たものらしく、天智天皇(鈍智てんほう)、持
統天皇(女郎てんじん)、中納言家持(中右衛
門かかもち)などと、語呂を合せて作者名をか
かげている。斯うした、作者名までもじって出
す例は後世にもある。

この本、一頁に一首づゝを出し、雲形をおい
て上に歌を出し、下に歌意にそった画を出して
いる。絵の中には、近藤清春のように、詞を入
れてはいない。清春の絵が、略画、漫画的であ
るのに比して、これは、挿画風で、ていねいに
画かれている。

「犬百人一首」の犬は、にせものの意であるう
か、いぬ山椒、いぬいちご、いぬたでなど、植
物にいぬのつく場合は、まがいものをさしてい
る。この百人一首、いぬと冠したのは、小倉百
人一首に対して、えせ百人一首といつたのであ
る。勿論、百人一首というからには、百人が一
首ずつ詠んで集めたものである筈である。然る
にこれは一人の作者により、百人一首になぞら
えて作った、一人百首なのである。その意味で
も犬百人一首というわけである。百人一首の各
歌になぞらえたので、百人一首と称した。

歌は小倉百人一首の歌に語呂をあわせること
につとめている。庶民の生活をうたっているこ
とが多い。漸く文字を知る人が多くなって来た
寛文の時代で、百人一首がすでに民衆のものに
なつて、歌詞の意味がわからなくても謳われる
歌謡のように、百人一首は民衆の中に入ってい
くにしたがつて、めんどろな歌意はおかまいな
しに、百人一首は暗唱されて庶民の中に存在す
るようになり、これは、歌留多の流布につれて
いよいよその事は甚しくなり、今でも、
名にし負はば逢坂山のさねかつら人に知ら
れて来るよしもがな

と清音に読んでうたがわらない読み手もあれば、
「水くぐるとは」と濁音によんで平気ない読み
てもいて不思議はないのである。しかし語呂あ
わせのもじりの方はよくわかることを必要と
している。

異種百人一首には、頭註のあるものが多い
が、これにはそれがない。

今様職人尽百人一首

近藤 清春作
享保年間刊

- 1 軒の板かりほぞあなのみをえらみわがでしど
ものせいをだしつ (大工) 天智天皇
- 2 かるすぎて能書の芸を羨むも恥をかくてふあ
たまかく山 (物書き) 持流天皇
- 3 足曳の合鍵音のちんからり長々し夜を明かす
金鍵 (かぢや) 柿本 人丸
- 4 屋根の裏に釘打つ音の拍子よく軒の小舞にい
たはふきつつ (屋根方) 山辺 赤人
- 5 大方のすさをふみわけ土こねの小手ぬる腕の
朝はつめたし (左官師) 猿丸 太夫
- 6 かざりよく渡せる弦のおく琴はしたてて見れ
ばよきねじみなり (琴三味線師) 大伴家持
- 7 あまたさらぬる彩色の水にかは絵の具のいろ
に出しつやくま (絵師) 安倍 仲麿
- 8 わがつばは皆人たつて所望する世にしやうあ
みと名をば云ふなり (つば師) 喜撰 法師
- 9 花の色は移しにけりな数々にわかみづうちを
造りせしまに (造花師) 小野 小町
- 10 これやこのぬるもたたきもかざをりはしめを
紫あふうちのせき (鳥帽子や) 蝉 丸
- 11 碗とはち安手間かけて塗りあげんとふさみは
かけてあはぬつきもの (塗師屋) 参議 篁
- 12 天つ風雲のかけ橋ぬひとめよ千鳥を裾にしは
しちらさん (縫はくや) 僧正 遍昭
- 13 つく鐘の下よりおちるぜんまいの数ぞ積りて
時をうつなり (時計師) 陽 成院
- 14 道なかでしめす桶はにたが結びて磨きかけに

- 15 弓をため張る肱にしてひかへみむ我が弓勢で
的にあてつつ (弓師) 光孝天皇
- 16 裁ち離す袖のみ幅の丈におふるまづきれとら
ばゆきさしてみむ (仕立屋) 中納言行平
- 17 渋や引く紙張りきかす竹かは籠つや塗りなく
は水はじくとは (つづら師) 在原業平朝臣
- 18 すみのきは石に刻るなのきりす多て庭の通ひ
しひとましくらん (石切り) 藤原敏行朝臣
- 19 ひひな形かんかくあしの模様とも合はでこの
儘もちひてみよとや (上絵張物) 伊 勢
- 20 足袋ぬへばつつまた狭し何とせう底ひろげて
もあはぬとぞ思ふ (足袋や) 元良 親王
- 21 上紺と染めし仕上げの並紺もあつらへの人も
待ちかぬるかな (表紙や) 素性法師
- 22 彫るからにあいのさらひをすきみれば無惨や
欠けて直ししつらん (判木屋) 文屋 康秀
- 23 打ちみれば日々ねじみぞ出でにけれ我か手
調べのなるにはあらねど (鼓屋) 大江千里
- 24 此さびはやきもとぎあへず荒砥かけあまたの
砥石かけてみるみる (研ぎ屋) 菅 家
- 25 なにしいはば大坂ぶりのすみかつり人にきせ
てはゆふ由もがな (鬘屋) 三条右大臣
- 26 風呂の釜かねの鑄物のろくろあらばいまひと
ひさのけつり待たなん (鑄物師) 貞 信公
- 27 みがきつつ塗りて書かるたつ田川いつかく
ていの蒔絵かわかん (蒔絵師) 中納言兼輔
- 28 花火とは夏ぞせはしまさりける人皆うさを
はらすと思へば (花火師) 源宗于朝臣
- 29 鎗先のきれなく見えしくされ鑄あか鑄ぬけぬ

- 30 心あてにをらばやをらむぎん要をり間に合は
ぬしらほねのそ (扇や) 凡河内躬恒
- 31 綿帽子たなうりのかみとみるまでにうすわた
やれにふくむ水ふき (綿帽子や) 坂上是則
- 32 あまかはに風のやれたるつくるひは直しもや
らでもみいれの毬 (まり屋) 春道 列樹
- 33 御仏の光かがやく鉞のいろとくこがたなのは
かのいつらむ (仏師) 紀 友 則
- 34 はりもかもさす人にせんから傘ののりもあぶ
らの渋ならひくに (唐傘屋) 藤原 興風
- 35 ほるはいさ下絵もしらず唐草の花でも彫りの
ようできにける (彫物大工) 紀 貫 之
- 36 まつりをばまだ床ながら踏みぬるを孤のいづ
こにへりはくるらむ (畳屋) 清原深養父
- 37 からかみに風のあたりしもちぬのはきらひき
とめぬ形ぞつきける (唐紙や) 文屋 朝康
- 38 けづらるる手間もかまはずさす箱の釘目とお
るもあしくもある哉 (指物師) 右 近
- 39 かたしふの荻のしのぶをほりぬれど重ねてな
どかしたへとをらじ (型屋) 参 議 等
- 40 ほりぬれどかたも出来けりべつかうのよもや
不出来と人の云ふまじ (鏡立) 平 兼 盛
- 41 さびずてふあかがね磨ききせにけりいろつ
にこそ多くほりしか (飾屋) 壬生 忠見
- 42 契りきなかたみの小袖はたとなしすぐにお寺
に名をとどむとは (天蓋屋) 清原 之輔
- 43 あくうちの後のしあげのかずみればうつして
ひかりはくは輝く (箔屋) 権中納言敦忠
- 44 編む籠のあみてしことは中々に手間かもひま

もいとほざらまし(かご屋) 中納言朝忠

までの艶をみしかな(鏡師) 赤染 衛門

掛けんとぞ思ふ(とうかち) 源俊頼朝臣

45 径師どもびやうぶ表具は多くともみのかけ張をならふべきかな(大径師) けんとく公

60 大ふつのいくひのなりはほていとまたつぎ羅宇のつかのはしたち(煙管) 小式部内侍

75 ちがねかけし僅かの金を鑄かけにてやすりなほして後のゆかげん(白金細工) 藤原基俊

46 杉の戸をはしるしきゐのみぞをつきしはめてわたすしよくの道かな(建具屋) 曾根好忠

61 古への奈良のやきちのやきだしはけふ大坂に聞えぬるかな(茶碗焼) 伊勢 大輔

76 管の鍼とぎかけ磨き金銀のみすやさくらに外に釣鉤(針師) 法性寺入道前関白太政大臣

47 木のもく目もりける筆の漆びきぎすこそ見えね盤はきによる(碁盤屋) 惠慶法師

62 夜をこめて鳥のうたふは聞きけれど世に大方の昼もひまなし(臘そく師) 清少納言

77 毛をはさみ板にはさまる刷毛川のぬけてもすゑにきり出さんと思ふ(はけ師) 崇徳院

48 かみをいためいま上塗の絵具はき仕上げて手間をかかるものかな(張子師) 源 重 之

63 紙はただもみてほさんとなばかりを渋ひくならでぬる油かな(かつばや) 左京大夫道雅

78 網代駕籠かこふござうちはるひやうの幾多まきゑのおきし乗物(乗物師) 源 兼 昌

49 ひかきむろ瓦焼く火の夜はきえて昼はもえつつさますと思へば(瓦師) 大中臣能宣朝臣

64 檉棒のつげの山桐それぞれにゆがみをなほす木々のなりふり(棒や) 権中納言定頼

79 綿風につるうつ弓のわきまよりくずいづるちりのめこそ悪けれ(綿打) 左京大夫頭輔

50 かわをためおどしの糸は小桜になめしくさりのためしぬるかな(具足師) 藤原 義孝

65 うらぬひの縫はぬれうくちある物をへりにくしかたなりそよきけれ(煙草入司) 相 摸

80 なに皮もこそげてさらす黒皮の板はりかけてもむとこそ思へ(皮細工) 待賢門院堀河

51 かくとだに絵馬は神社の捧げもの諸願を結ぶ施主の思ひを(絵馬師) 藤原実方朝臣

66 下戸ともに甘きがまさる落雁の菓子よりほかにすく人もなし(くわし司) 前大僧正行尊

81 ほど高き曳きけるふしを見上ぐればただ鋸のはこそぼれる(木挽) 後徳大寺左大臣

52 曲げぬれば綴ぢる物とはかはなれどなほいたへぎの薄板の数(檜物屋) 藤原道信朝臣

67 春の糸のよにめづらしき判じ物かたちをまなぶ画こそをしけれ(団扇師) 周防 内侍

82 かもにひけてもなりよきできあひのうふげ毛抜きは名代なりけり(毛抜師) 道因法師

53 なに木つぐ一重さく木の枝振りは庭のみこしの松とこそ知れ(庭木作り) 右大将道綱母

68 衣にもたちてこのまま仕立てなほごせうかるべき菩提みちかな(衣師) 三条 院

83 世中よふさこそかはれおかみうり山の奥にも珠数ぞするなり(珠数師) 皇太后宮大夫俊成

54 つく金のひくすぢまではかたけれどみがかききりのてらすすず金(すず師) 儀同三司母

69 うるしひくみがきのぬかとたたきをば朱鞘の色のにしきなりけり(さや師) 能因法師

84 なづけをばまたこの頃や行きらずふゆげてかさんひまぞほしさよ(筆や) 藤原清輔朝臣

55 束の糸は巻きて形の見ばもよくつやこそうつりて猶手ぎはよし(束巻師) 大納言公任

70 桜木の矢をばこしらねをまけどいつの弓もけつかいの場所(揚弓師) 良暹法師

85 糸もすげて棕栢そろふけばとけやらぬねまきてほうきましまひける(箒師) 俊恵法師

56 ほらざらん此木のほかの文字をばいてあいせうに合ふ事もがな(印判師) 和泉 式部

71 くまざればかたぢの糸はおとふさのあわぢしんくにみつ組ぞくむ(糸や) 大納言徑信

86 なかせつつつけざやさるのまねをつく硫黄つけつつ薫たばねおく(付木師) 西行法師

57 手くりかけて御簾や編むともまかぬまに房うちかけし大うちにてん(御簾作り) 紫式部

72 音に聞く高しま硯青石のはしりや墨の水をこそもて(硯師) 祐子内親王家紀伊

87 紫のへりもまだひぬあをりこそきりたち花のあをきらしやぬひ(きつつけ師) 寂蓮法師

58 はりますぎうすの水ぎはつやきよくいで切くちをそろひ合はする(紙漉師) 大貳 三位

73 たん染のああくの小紋出来にけりとくさ渋さはたらずもあけなん(紺屋) 前中納言匡房

88 なりはただつかふ身振りの顔形ち気をつくしてもよく刻むべき(人形師) 皇嘉門院別当

59 ときわくて水がねとのこきせふけてかほふく

74 光りける磨きたてにし銅壺のなをす葉籬の鑄

89 ひきし糸土をばこねよかげんとも水つけこと

にまはるかははけ(土器師) 式子内親王

90 たつかはなおしなばひのしいでんの合せて

縫ひし糸はきれまじ(印伝師) 殷富門院大輔

91 きりぎりすひくや亭主のなかせうり黄楊の三

つ櫛人も買ふなん(櫛挽)後京極撰政太政大臣

92 己のなり月日のかたちまわりの人らを知り

ねまはる日もなし(東師) 二条院讃岐

93 沖中はうき木の鉤けづりこぐあまたゆぶねの

つくりかはしる(船大工) 鎌倉右大臣

94 日和降り止まぬ三月の長降りは降る雨さむく

足駄うるなり(足駄師) 参議 雅経

95 多くなきいらせの金にあたるとも我がこせこ

そはすみぞめの道(し木師) 前大僧正慈丹

96 めをきらふあまた石をきるからに引きゆくも

のは茶碓なりけり(碓目切) 入道前太政大臣

97 買ふ人をまぎをの雪駄玉子なりはくや皮緒の

きりまはしかな(雪駄師) 権中納言定家

98 とこそこしあまた諸人ふうぞくのみたてて結

ひし髪かたちなり(髪結ひ) 従二位家隆

99 花もよし草も水ぎは手際よくすなげいれの

見ばよきには(立花師) 後鳥羽院

100 百病の重き病を直すにもなほやくしゆあるく

ふうなりけり(医師) 順徳院

【解説】「今様職人尺百人一首」一冊、大本

黒表能袋綴。近藤助五郎清春作並びに画。近藤

清春は、江戸名所百人一首と、あとに収める道

化百人一首と、三種の百人一首の作、並に画を

著している。江戸名所百人一首が、寛文三年と

明らかにされているのに対し、「今様職人尺百人

一首」と「道化百人一首」は、享保年間の刊

とだけわかつている。

職人尺は、江戸名所と同じく、小倉百人一首

の作者と、その歌の語呂をあわせながら、主

題の職人について詠むのであって、二重のかせ

をはめて歌を詠むという趣向のおもしろ味を追

ったものである。本の構成は、両者ともに同じ

様式をつかっている。一丁の表裏ともに二つに

わけ二つの歌を出し、それにちなんだ職人の様

子を描き、会話を入れている。

20 足袋縫へばつつまたせばし何とせう底ひろ

げてもあはぬとぞ思ふ 元良 親王

これは足袋職人、三人の職人と一人のお客と

画く、上部二人の職人の会話「なんでもめづら

しいおうきな足じゃ。」下部に職人と客、「はて

お前のは十六文今立ちました」「はて大きな足

じやどうりてはまらぬ」と会話がかわれ、足に

ものさしをあてて計っている図、左上に足袋型

に「寿たび」という文字が入っている。図の左

下手に「畫工近藤介五良清春筆作」とある。こ

れは五丁目ごととその裏面にある。十枚目、十

五枚目、二十枚目、と四個所、近藤助五郎清春

筆作の文字を入れている。最後の二十五枚目に

は入れてない。二十五丁裏は、

99 花もよし草も水ぎはてぎはよくすなげい入

れのみばよきには(立花師) 後鳥羽院

100 百病の重き病を直すにもなほ葉しゆあるく

ふうなりけり(医師) 順徳院

上は総髪の立花師、花器に、松と水仙のような

花をいけてをり、「なげしのかくは此いきでこ

ざるぞ」と云い、うしろに扇子をつかう人あり

「ああおてぎはでござります」とほめている。

下図は、医者と患者らしく、患者かしまって

「おみやくをごろうじて下さりませ。」という、

医師は「いますこし待たしやりませ」と云って

いる。薬箱様のものをわきに、薬調合している

風。背にしている屏風は、竹に雀の飛んでいる

図。あるいは藪井竹庵といった酒落が利かせて

あるのではなからうか。それにしても「医者」

も職人の中に入れてあるところが、まことにお

もしろい。

医師ばかりでなく、書家(もの書き)画家

(絵師)も職人のうち。このほか、×師という

もの、左官師、琴三味線師、つば師、造花師、

時計師、おけ師、弓師、つづら師、鋳物師、蒔

絵師、花火師、槍師、仏師、張子師、瓦師、具

足師、束巻師、印判師、紙漉師、臘燭師、など

あり、鍛冶や、えぼしや、ぬしや、仕立屋、版

木や、かつらや、鼓屋、とぎや、毬屋、畳屋、

指物屋、かざり屋、箔屋、など、屋根方、石切

り、庭木づくり、御簾作り、茶わん焼き、白金

細工、わたうち、皮細工、櫛挽、臼の目切り、

髪ゆひ、など動作をあらわすものも多い。

今、職人にあたる言葉は技術をもつ人にあた

ろう。教師、美容師、技師などはよいが、詐欺

師、箱師などはあまりよくない技術屋である。

現代の技能の特殊なもの、弁護士、公認会計士

弁理士、税理士があり、今は弁士(活弁)はな

くなくなった。紳士は職業ではない。文学士、文学

修士、博士は、職業ではないが、弁護士、税理

士などと同じ概念の職人である。

どうけ百人一首

近藤清春作・画
享保年間 板行

- 1 あきのたのかりほすまでにひよりよくわが子どもらをらくにすぎさん てんち天わう
- 2 春過てなつ着てみればしろかたびら子どもほしがるあまがかかさま ちとうてん王
- 3 あしびぎの山やがうどん汁もよくながながしきをひとりすすらん かきのもとの人丸
- 4 足袋のうらに踏みつけみればいたづらな瓜の種をばつつみおきつつ 山べのあかひと
- 5 おくさまの文箱ふみわり泣くしかがまどふていだし銭ぞかなしき さるまるだゆふ
- 6 かささしてわたせる板にほす飴のしろきをみれば粉ぞふきにける ちうなごんやかもち
- 7 甘酒をわかつてみればかすがあるおかさにひとつありもしやうかも あべのなかまる
- 8 わがうをはみうらのなまこしばさかなよい物うりと人はいふなり きせんほうし
- 9 かほのいろはかはりにけりないたはしやわるいよたかになじみせしまに をのの小町
- 10 これやこのくふも食はぬもとなりではつくもつかぬもぼたもちのおと せみまる
- 11 わたのぼろやとところどにぬひつけて人にはかくせかかがつぎごと さんぎたかむら
- 12 あまだまれふぐのうはじる吸うてみよおこのすがたみえばかりくさん 僧正へんしやう
- 13 つらつぎのみるよりおぢるおとくじよろこひぞつもりてふくとなりける やうぜいゐん
- 14 みちばたでうりやるもちやの太郎べどのみな

- 15 君がためはなげのぼしてばかなつらわが子どもらがぬれをやりつつ かうかうてんわう
- 16 立わかれいとやのむすめみせにおふるまだとしゆかばいとかにゆこ 中なごんゆき平
- 17 ちはやふる紙くずかひにたどん売りからくりみせて水あめをやる 在原なり平朝臣
- 18 生だこの短かき脚の太きをもきらでこのまま食うてみよとや い せ
- 19 おびごとを今またすればなんのかの身をうりかいて金ださんとぞ思ふ もとよし親王
- 20 いまとくといひしばかりのながだんぎあくびのでるをこらへているかな 素性法師
- 21 よみのゑの七九さんまのあざあがりよめのかちにげ人もにくまん 藤原しげゆき朝臣
- 22 ぶつからにあきたつつつきしをるればむざんやかかがあきれてぞいる 文屋やすひで
- 23 なりみればひびにつらこそうたてけれわが身こどもをあくにもあらねば 大江のちさと
- 24 此たびはうそもとりあへずさん用のくやみておしきかねのかずかず か かん け
- 25 なにといわば大ぎけのみのあばれもの人にぶたれてくるよしもがな 三条の右大臣
- 26 かぐらまふみこのおとめに心あらば今一さしのはつふまたなん ていしんこう
- 27 さけのはらおきてのまるる水のかずいつのむとても苦しがるらん 中納言かねすけ
- 28 いまとては冬ぞさむさもまさるける人目もはぢもいらぬと思へば 源むねゆき朝臣
- 29 心あてにかさばやからんぜにとかねときまに

- 30 あはぬ質もつのだね 凡河内のみつね
- 31 あたまからつれなくふりしわかれ酒あかつきかへるうきものはなし みぶのただみね
- 32 のみほうけありたけのぜいとみるまでもそしらぬていでくれぬつらつき 坂上これのり
- 33 やとをりにぎりのかけたる質物は流すもつらきもみ手なりけり 春道のつらき
- 34 親方の叱り罵るながの日にしつ心なきはらもたつらむ きのとものり
- 35 がんもかもしる人もせよたるさかなまてばかつほのともならくふに 藤原のおきかぜ
- 36 人は皆恋路もしらで色里はしんぞゆかしの顔をみにくる きのつらゆき
- 37 まつの夜はまたよひながら更けぬるに君のいつくにつれやどるらん 清原のふかやぶ
- 38 霜つゆに風に吹かれしあか切ればつらふきかへるひまぞおれける 文屋ともやす
- 39 あててなく身をもかまはずくらひてし人のかんしゆのおしくもあるかな う こん
- 40 あさちやうけのどのすきはらのみくへど歩きてなどか腹のひだるき さんぎひとし
- 41 しのぶれど腕にほのけるわが恋はもしやたはけと人のいふまで たいらのかねもり
- 42 恋すぎてわが身ははだかたちのまま人しらずこそ思ひくやしか みぶのただみ
- 43 ちぎりきなかたみに袖をすみづきんすゑはめかけてなほやらじとは 清原の元すけ
- 44 あちみでののちのこはだにくらぶればいわしのぬたでのむはさりけり 権中納言あつ忠
- 45 せう事のあいてひまおばなかなかにわれをも

- 子をもうらみざるまじ 中納言ともただ
45 あまれどもくふべきものをおしまれて身のい
やしきにくやみべきかな けんとうこう
46 からのにのたてるひいななくわしをかいつく
おとたかくくさのもちかな 曾根好忠
47 八重ひとよしげくもねやのかよひぢに人こそ
見えねこわくまもなし 多けいほつし
48 はらをいたみいまうみさんの乳房のみいだき
てよひをあかす子そだて 源のしげゆき
49 とかくもりとが抱く子のよるはほえひるは
すねつつわやをこそいへ 大中臣能宣朝臣
50 親のため年よらざりし身なれさへわかきのう
ちにつとめけるかな 藤原のよしとか
51 なくとだに親はくすりの切もぐささしもしか
りなすゆるおもひは 藤原実方あそん
52 まけぬればかはぬものとは知りながらなほ面
にくきあきないの道 藤原みちのぶ朝臣
53 なさけなきひとり寝る身の寂しきはほかにい
るある後家とかはしる 右大将道綱の母
54 貸す金の義理となさけで貸しけれど今日を明
日とぞのぼしけるかな 儀同三司のはは
55 琴のおとはたへてさみしく聞ゆれどうたぞひ
かれてなほきこへけれ 大納言きん任
56 散らざらむこのきのほかの咲きし見にいま一
えだの折るをまたなん いづみしきぶ
57 なのりかけてみしやそれともひかぬまになも
かくれなき武士の道かな むらさき式部
58 練馬うまみなの大根をひきゆけばみせかふ人
をまちて買はする だいにの三位
59 夜食とて買ふまじものをよびかけて三味ひく
ほどの芸を見しかな 赤染えもん
60 大屋さまよひゆく人はとほければまだ客もみ
ずあまがぜんだて 小式部ないし
61 いにしへのならぬ親子のいとなみにようここ
までもしたひぬるかな いせの大輔
62 夜をこめてともに空ねはしたれども世に大酒
のかずはゆるさじ 清少年ごん
63 ひまはただともに遊ばんとはかりあふやぶ入
りならでつるよしもがな 左京大輔みちまさ
64 ふさだらけうちのかねざりたえだえにかりか
たいだすぜにのありたけ 権中納言定頼
65 かがみかけさけとそばだにふるまはばこで
くはなんぜにぞをしけれ さがみ
66 もろともにかせぎと思へのりうりの花よりほ
かにうるものもなし 大僧正ぎやうそん
67 はるる日はよめばかりなる寺まゐりぜひなく
つれぬうはぞいでける すわうのないし
68 ところにもあはでたなをばかへぬればうれし
かるべきうばがつかかな 三でうのゐん
69 わらじはく身延の山の詣ではたぐひまれな
るけしきなりけり 能因法師
70 三味線にいとをたづさへひきぬればいろけも
おなじあとの遊興 良運法師
71 わるさればかぢやのおうばなれそめてかしの
まるやに波風ぞたつ 大納言つねのぶ
72 おとにきくおかしなあまのあだなには禿げし
や鬢のぬけもこそすれ 祐子内親王家紀伊
73 大黒のきのへのななちやたきにけのとうふの
ぐつにたすもかいなん 権中納言匡ふさ
74 よかりける人にくはせしあまぼうし渋しかれ
とは思はぬものを 源俊頼あそん
75 ぢぎりかけしせもがしちをかざりにてあは
れおぬしはあすもねるめり 藤原 基俊
76 ぬたのはらのみ出みれば親方のみるめに逃る
起きつ転びつ 法性寺入道前関白太政大臣
77 身をくやみいろにせかるる銭金のくれてもつ
ひになびかぬと思ふ 崇徳院
78 あはせしまもよふちどりのおとるにはひくよ
いさみの船のかすもり 源兼昌
79 秋風に七夕さまのたんざくにもちいづるつゆ
の竹のかはゆさ 左京大夫顯輔
80 なのりいでとるてもしらすまひとりふまれ
てけさはものくはぬと思へ 待賢門院堀河
81 ほどすぎてだきつる顔をながむればまたおふ
くろのつらそふくれる 後徳大寺左大臣
82 ねがひわびさてもこそせうはあるものをよきに
たすけはあみだなりけり 道因法師
83 身のなかよおちこそなけれどたづね出で江戸の
奥にも乳母ぞありける 皇太后宮大夫俊成
84 なからへばまた狩人がしのばれんきじとみる
まに今はうちけり 藤原清輔朝臣
85 よもすがらやど思ふまではあんじしがあめの
降るさへつれなかりける 俊恵法師
86 あぎれつつ月夜にかまをぬかれけるたはけつ
つなる我がしよたいかな 西行法師
87 くらずまひつちもまだひぬうちぶしんくどた
きすむるかかが夕めし 寂蓮法師
88 かにえの穴のかり寝の甲羅ゆる身をはさみ
てやにげわたるべき 皇嘉門院別当
89 猫のをよくるはばくるへじやらしてもしりふ

るなかのよはりこゑする

式子内親王

90 見せたやなあしまのあまの恋だにもほれにぞ

ほれしいろはかはらじ

いんぶ門院大輔

91 きりぎりすなくや軒ぼのつるし簞こどもかひ

とる人もかふなん

後京極摂政前太政大臣

92 わがいへはすぎやとみへぬ床の梅の人こそた

てねわらふものなし

二条院讃岐

93 しのぼすはすぼんもがもなかんそなくあまた

子どものつくでかなしも

鎌倉右大臣

94 ひさしのき屋根のあさ霜とどこほり降る雪寒

くころびうつなり

参議 雅経

95 さすてなく歩をつく飛車に王手かなわがかつ

駒は金銀と角

前大僧正行尊

96 たなさがす皿鉢の鯖の猫ならでふちゆくもの

は我身なりけり

入道前太政大臣

97 この人をややとともかのわびごとをやどやも

しもの身をひけばこそ

権中納言定家

98 かせぎよくなんのおららがわざくれはみそか

は闇のしるしなりけり

従二位家隆

99 くふもうしくはぬもつらきあづき粥きり思ふ

ゆゑに物思ふ身は

後鳥羽院

100 ももしりやふるきのしめのきゆるにもなほへ

ばりさくおしめなりけり

順徳院

〔解説〕「どうけ百人一首」近藤清春作並びに画。享保年間刊。大正十四年稀書複製会印行

本、五百部中一一六によって翻刻した。黒表紙大本袋綴。題簽に「本うたなをし、どうけ百人一首」本文、各丁表裏を各上下にわかち、歌と画をのせ、二十五丁。小倉百人一首によって

もじり歌百首をかかげる。前場の同一作者「江

戸名所百人一首」、「今様職人尽百人一首」にお

いては、歌と画は罪でわけてあったが、これは

第一丁表だけは画の中に歌が書き込まれてあ

る。同じ「本歌直し」ではあるが、前二種の百

人一首のように、名所とか職人に拘束されず自

由になっている。

2 春すぎて夏きてみれば白かたびら子どもほ

しがるあまがかかさま

持統天皇

といった風である。一丁表下に「近藤助五郎清

春筆」と署名を入れ六丁裏に「画工近藤介五良

清春筆」とあり、二五丁裏の最後に「百人一首

どうけ歌、作者近藤介五郎」と署名している。

この、「どうけ百人一首」は、その百人一首の

名称と、清春の詠んだ歌は、江戸時代を通じて、

もつとも多く伝えられたようである。

別項に「校合道化百人一首」としてかかげる

ものは、四種の異版を校合したものであるが、

ほんのわづかな詞句の異動がある程度で、大同

でわづかの小異の程度である。絵はそれぞれに

新刻したものである。そして前または前後に、

画や歌をそえ、ていさいの新らしさを出してい

る。それらは概ね小本で、然も一頁を四つにわ

り、十一丁半に歌を収めている。

生だこの短かき肢の太きをも切らでこのま

ま食うてみよとや

伊勢

何といはば大酒のみのあばれ者、人にぶた

れているよしもがな

三条右大臣

奥様の文函踏みわり泣くしかがまどうてい

だす錢ぞ恋しき

猿丸 大夫

函を踏みわって、弁償するために、ひもに通し

た銭を出して泣いているのもあわれである。

顔のいろはかはりにけりないたはしやわる

い夜鷹になじみせしまに

小野 小町

はいささかはげしい。床を起き上った男に、鏡

をつきつけている男、「おのしの顔を見やれ、

友達のつらがよごれる」床の男「おゝなさけな

や、いろけもすたつたことじや」など会話が書

かれてる。

異種百人一首の中に、このような、いわゆる

本歌なおしの一群があるが、それらは、おおむ

ねこの、近藤清春の作った「どうけ百人一首」

の系統をひくものである。それは、歌がそれぞ

れ庶民の生活の中に入って詠まれているのが共

感を得たのである。その影響の大きいことは思

いの外と云ったところである。

この「どうけ百人一首」は、必ずしも大した

出来ではないのに、江戸時代の、この種の異種

百人一首に、多くの影響を与えている。そっく

り模倣をした歌を含んだ「どうけ百人一首」は

あとを断たないと云ってもよい。

四種の、後に出た「道化百人一首」を最初か

ら異動を見ても、六首目まで全く同じで、七首

目「甘酒をわかつてみれば」が「あまが酒かん

してみれば」「あまり酒」など異同があると云

ったものである。こうした小異でさへ、十首に

一首もないほどである。この四種、うち一つだ

けが、寛政二庚戌板行の刊記があり、この書か

ら、六十年内外の年月がたっており、その他も

その前後である。

道化

芝居百人一首

諫鼓堂尾佐丸撰
式亭三馬序

- 1 吸ひものをこぼした人の気の毒さ我が衣手は
露にぬれつつ 天智天皇
- 2 水仕合すみしあとにはしほりたる衣ほすてふ
天の香具山 持統天皇
- 3 娘の子あすの芝居を待ちかねてながながし夜
をひとりかもねん 柿本 人麿
- 4 兄弟の貰ふ狩場の絵図面もふじの高根に雪は
ふりつつ 山辺 赤人
- 5 入相の鐘二つ三つひぐらしの声きくときぞ秋
はかなしき 猿丸 太夫
- 6 宵の間の狂言してもあんどろのしろきをみれ
ば夜ぞ更けにける 中納言家持
- 7 真白に見ゆる名古屋が紋所三笠の山に出でし
月かも 安倍 仲麿
- 8 我がのぞむさじきをよそへ渡されつ世をうち
山と人はいふなり 喜撰法師
- 9 狂言もまはり道具にうつつゆく我が身世にふ
るながめせしまに 小野 小町
- 10 これやこの出るもはいるも木戸口にしろもし
らぬもあふさかのせき 蝉 丸
- 11 大当り役者最負の評ばんを人にはつげよあま
のつり舟 参議 篁
- 12 あなたがたどのさじきじやと木戸口で乙女の
姿しばしとどあむ 僧正 遍昭
- 13 はじまりは女出入の水仕合恋ぞつものてふち
となりぬる 陽 成院
- 14 けんくわした人間達で鬢の毛のみだれそめに

- 15 舞台際からだはさのみ寒からで我が衣手に雪
はふりつつ 光孝天皇
- 16 供に來たでつちはうちへいなばいね待つとし
聞かば今かへりこむ 中納言行平
- 17 紅絹綿伴着て投げらるる橋のたてからくれな
ゐに水くぐるとは 在原業平朝臣
- 18 むすめの子ひいき役者を思ひ寝の夢のかよひ
ぢ人目よぐらむ 藤原敏行朝臣
- 19 けんくわする中引きわけてたたかれつあはで
この世をすぐしてよとや 伊 勢
- 20 付けねらふ趣向は親の敵役に身をつくしても
逢はむとぞおもふ 元良 親王
- 21 やみ仕合手に入る文をとりおとし有明の月を
待ち出でつるかな 素性法師
- 22 難助と来芝と紋はかはれどもむべ山風をあら
しといふらむ 文屋 康秀
- 23 割合の土間を見すてて出るをしき我が身ひと
つの秋にはあらねど 大江 千里
- 24 見わたせば土間やさじきに鬘結ひのみみぢの
にしきかみのまにまに 菅 家
- 25 芝居すぎ狂言ごとくに欠かさねば人にしられで
くるよしもがな 三条右大臣
- 26 ふるまひし芝居の客の心あらば今ひとたびの
みゆきまたなん 貞 信 公
- 27 酒のみは茶屋の來るまをまちかねていつみき
とてか恋しかるらむ 中納言兼輔
- 28 うづらまで泪もよほす愁嘆に人目もくさもか
れぬと思へば 源宗千朝臣
- 29 いくつめか同じしるしの盛しきておきまどは

河原左大臣

せるしら菊の花

凡河内躬恒

- 30 早がはり替る衣裳におしろいのあかつきばか
りうきものはなし 壬生 忠岑
- 31 気の利いた茶屋の料理に出しものもよし野の
里にふれるしら雪 坂上 是則
- 32 画きたる川に木の葉の波まくはながれもあへ
ぬもみぢなりけり 春道 列樹
- 33 ひやうばんはあらしが当り狂言にしづ心なく
花のちるらむ 紀 友 則
- 34 割出間に酒の相手の一二人まつも昔の友なら
なくに 藤原 興風
- 35 三角な紙ちるばかり色けなく花ぞむかしの香
に匂ひける 紀 貫 之
- 36 行燈をぶらりと下げて引上げる雲のいづこに
月やどるらむ 清原深養父
- 37 ひとつとも市川流の太太刀をつらぬきとめぬ
玉ぞちりける 文屋 朝康
- 38 切落す首は張子でお仕合せ人のいのちのをし
くもあるかな 右 近
- 39 手をつけたばかり肴に弁当のあまりてなどか
人の恋しき 参議 等
- 40 引く役者出を待ちかねる顔色はものや思ふと
人のとふまで 平 兼 盛
- 41 美しきひいきの役者むすめきの人しれずこそ
思いそめしが 壬生 忠見
- 42 仕掛よく生えたごとくに大木をすゑの松山波
こさじとは 清原 元輔
- 43 気がつけば皆花道へ追って行くむかしは物を
思はざりけり 権中納言敦忠
- 44 割土間におしあふてみる芝居好き人をも身を

もうらみざらまし 中納言朝忠

45 てら子やのつくゑにのりしよだれくり身のいたつらになりぬべきかな 謙徳公

46 ぬれごとしかたきのあとを追かけて行衛もしらぬ恋の道かな 曾祢好忠

47 木戸までの急用よびてもらへども人こそ見えね秋は来にけり 惠慶法師

48 にせものの茶入は日々に一つづつくだけでものを思ふ頃かな 源重之

49 大詰にとほしく見する燭台も昼はきえつつ物をこそ思へ 大中臣能宣朝臣

50 打ち出しの幕ををしみて見物の長くもがなとおもひけるかな 藤原義孝

51 ひく役者呼んでもらうて盃をさしもしらじな燃ゆるおもひを 藤原実方朝臣

52 芝居見の留守居せよとの夕べより猶うらめしきあさぼらけかな 藤原道信朝臣

53 ひいきする役者の幕の明るまはいかに久しきものとかは知る 右大将道綱母

54 ひとかたなきつかけもよき反り打ち今日を限りの命ともがな 儀同三司母

55 しばらくと大きな声をあげ幕に名こそ流れてなほ聞えけれ 大納言公任

56 高つきの菓子に名札をおくりては今一たびのあふこともがな 和泉式部

57 駕かきは逃げてのあとのやみ仕合雲かくれにし夜半の月かな 紫式部

58 久しぶり土間で逢うたは誰やらといでそよ人を忘れやはする 大式三位

59 大仕かけ舞台いっばい板かへしかたぶくまで

の月をみしかな

60 大江戸くだり役者の初舞台まだ文もみずあまのはしだて 小式部内侍

61 御殿場をせり出す穴はそうじゆつのけふ九重に匂ひぬるかな 伊勢大輔

62 むかしとはちがうて木戸もきまりあるよにあふ坂のせきはゆるさじ 清少納言

63 ひいきぞと役者にあふてくちづから人づてならでいふよしもがな 左京大夫道雅

64 木戸芸者つかふこはねも出たやうにあらはれわたるせせのあじろ木 権中納言定頼

65 ぬれごと師見るばかり手もさされずに恋にくちなん名こそ惜しけれ 相摸

66 大入におされてひとつせつな屁のはなよりほかに知る人もなし 大僧正行尊

67 忠臣ののりぢの役者深手にてかひなく立たむ名こそ惜しけれ 周防内侍

68 やつしがた見惚れし娘忘れかねて恋しかるべき夜半の月かな 三条院

69 舞台際多がきし板の二三枚立田の川のにしきなりけり 能因法師

70 幕あきのきぬた拍子や田舎うたいづくも同じ秋の夕くれ 良暹法師

71 割込みの土間で見る人きうくつなあしのまろやに秋風ぞ吹く 大納言徑信

72 そそり者上座敷から茶か酒かけしや袖のぬれもこそすれ 祐子内親王家紀伊

73 奥深く花のしかけを見わたして外山の霞立たずもあらなん 前中納言匡房

74 切落しあたりてけんくわ大きわぎはげしかれ

赤染衛門

とは祈らぬものを 源俊頼朝臣

75 惜しまれし役者は名残狂言にあはれ今年の秋もいぬめり 藤原基俊

76 大仕懸海をたんだん引上げて雲井にまかぶ沖つしら波 法性寺入道前関白太政大臣

77 かりにゐてはなす隣のさんじきはわれても末にあはむと思ふ 崇徳院

78 約束の芝居の供もまぢかねていく夜ねざめぬすまの関守 源兼昌

79 三階にたなびく雲の間よりもれ出る月のかげのさやけさ 左京大夫顕輔

80 とつた役むすんで出たる黒髪のみだれてけさは物をこそ思へ 待賢門院堀川

81 うれひ場に泣かじとすれど女中づれうきにたへぬは泪なりけり 道因法師

82 闇仕合する幕際は日おほひにただ有明の月ぞのこれる 後徳大守左大臣

83 笛の音は下座に聞えて山翠簾の山の奥にも鹿ぞ鳴くなる 皇太后宮大夫俊成

84 なからへばまた菅原の白太夫うしとみしよぞ今は恋しき 藤原清輔朝臣

85 女形身を任すのもたからゆゑねやのひまさへつれなかるらむ 俊恵法師

86 役者よりからしを通すはな道にかこちがほなるわが泪かな 西行法師

87 見物もまづ今日はこれぎりときりたちのぼる秋の夕くれ 寂蓮法師

88 業平もやつせば下部業平と身をつくしてや恋わたるべき 皇嘉門院別当

89 片ひいきするのも人の前ありてしのぶること

のよわりもぞする 式子内親王

90 白妙の晒の禪水仕合ぬれにぞぬれし色はかは

らず 殷富門院大夫

91 敵役又傾城にふられては衣かたしきひとりか

もねむ 後京極摂政前太政大臣

92 道行に見とれる女内証は人こそしらねかわく

まもなし 二条院讃岐

93 花道や舞台の上を引道具あまの小舟のつなで

かなしも 鎌倉右大臣

94 狂言に哀れもよほすむら雨のふるさと寒く衣

うつなり 参議 雅徑

95 狂言の名代は富士見西行とわが立つ袖にすみ

染めの袖 前大僧正慈円

96 仕舞まで見よとすめて聞き入れずふり行く

ものはわが身なりけり 入道前太政大臣

97 お前さん何がしさんがごひいきと焼くやもし

ほの身もごがれつつ 権中納言定家

98 大入の土間へもち込む吸もののみそ氣ぞ夏の

しるしなりける 正三位家隆

99 かたき役ほろぼす時の大平記世を思ふ故にも

の思ふ身は 後鳥羽院

100 時代事あたりて金のまうかれば猶あまりある

むかしなりけり 順徳院

〔解説〕 絵本芝居道化百人一首、小本一冊袋綴
原本題箋、内題なし。はじめに、式亭三馬の序
あり。

小倉山の別荘に百人一首を撰み給ひしは京極
黄門定家卿なり。大戯場の花柵に一人百首を
詠みたりしは諫鼓堂尾左丸なり、(中略) 疇昔
近藤氏どうけ百首よく切落しに落ちたり。さ

るを彼が上をまたぎて、落首体を免れしは、

口調の高土間にあるゆゑなり。爾来狂歌堂の

どうれ百首、よく浅敷に受けたり。さるを夫

と肩をならべて、狂歌体を失はざるは句統き

の続華柵さしきにあるゆゑなり。天智天皇蟬丸も皆

割籠に押合て、金毘羅さまも西行も坐順はか

まはぬ百首に引かへ、番付面の位を分つに白

圈を隔て席を定むる名人上手の狂歌人。諸国

に許多のなつかよ中よ、中にもをかき戯咲

歌、よまれたりな妙でんすと、木戸芸者の読

立てめかして、たしか斯様か告されし口枝的

人の古風に做ひ序に出まするは、本町庵御存

じの式亭三馬戯題

とあり。なほ末自跋あり、

俳優の道は納まれる御代のうつは物なりと、

宣なる哉。幕あきの田の刈穂には、実をいれ

て見る芝居好あり。弁当を食ひ酒を飲めば我

知らず腹のはる過ぎて夏来にけりな白妙の、

湯かたびら着て棧敷に押合ひ、敦忠の唯暑さ

にも躬恒の常に見るを喜び、よしあし引の山

と積るは狂言の評役者の金箱、芝居を見ざる

人までも伴い打出て見る気になりけむ、田子

のうら茶屋水茶屋まで不時のお茶の来つどひ

て入りは大江の千里までも、評判高くや聞ゆ

らん。されば法性寺の御名長き日も、春道の

つらきもいとほで、遠き近きも行平の、きせ

んをいはず老若男女としよりもゆき小町も来

る価の高むらもやす秀といひ、きのつらゆき

もよし忠と思ふはおのおの好む心より最負の

眼も迷ふなるべし。我も人もその志は在原の

業平ならぬ平土間に、壬生の忠見のどんほう

は、大中原にはらふも有なん、是等の類はさ

らにもいはず揃ひの手拭赤染あれば仕着せ小

袖の紫式部皆清輔の清らにいであち、重之の

しげく行かふ、花道に立人々をはじめて定家

家隆家々の役者の芸に到るまで余さず漏さず

狂歌に詠じて、どうけ百首の口まねする役、

あふむ石といふものに等しくついに集めて一

冊となせり、人わらへなる業とはしれどただ

に止むも朽惜しければ板にゑりたる小倉山を

ぐらきより猶明かに出して恥をかきのもど熟

さぬ詞の後や先、かぞへあげなば百敷や古き

趣向の愚さをもし見給はむ人あらば忍ぶにも

なは余りあるたはけとやいはむ我はいとはじ

といふ。諫鼓堂尾佐丸述。

とある。これは、清春の本歌なおしとちがう点

は、本歌である小倉百人一首の、四五句(下句)

をそのまま残して芝居歌にしているのである。

式亭三馬は、長文の序において、尾左丸の才

能を賞揚しているが、芝居人として、練達に詠

んでいる。芝居に関して、最負や、さじき、芝

居の趣向など詠んでいる。

けんくわする中ひきわけてたたかかれてあは

でこの世をすぐしてよとや

など、けるつと詠みすてている。このように「百

人一首の四五句をそのまま用いてそのすれちが

いの味を出している。この技法は、三馬のいう

近藤清春の「どうけ百人一首」の糟粕をなめる

のではなく、「闇夜際」の技法に先行するもの

と云つてよい。中々の達詠である。

本絵 狂歌百人一首闇夜磔 鱗齋一鱸撰 文政九(一八二七)刊

- 1 秋の野に草ふみわけてかるむしにわがころも
手はつゆにぬれつつ 天智天皇
- 2 はるの雨はれてのどけき空色のころもほすて
ふ天の香久山 持統天皇
- 3 みせもはやひけ四つ過ぎの傾城はながながし
夜をひとかもねん 柿本 人麿
- 4 神棚へ供へて塩の白妙は富士の高嶺に雪は降
りつつ 山辺 赤人
- 5 つづれさせと夜ごとと夜ごとに鳴くむしの声き
く時ぞ秋はかなしき 猿丸 大夫
- 6 蕎麦売の声ほそぼそと行燈のしるきを見れば
夜ぞふけにける 中納言家持
- 7 昔芸者ちよつくりちよんとこれをこう持つて
三笠の山にいでし月かも 安倍 仲磨
- 8 風流はただ何ごととも茶でくらす世をうち山と
人はいふなり 喜撰法師
- 9 玉手箱あけてくやしき百とせのわが身世にふ
るながめせしまに 小野 小町
- 10 傾城のかはる枕の数々はしるもしらぬも逢ふ
坂の関 蟬 丸
- 11 風あらく山谷へ猪牙のはしりしを人にはつげ
よ天の釣舟 参議 篁
- 12 神楽堂うかれ柏子のお初尾にをとめのすがた
しばしとどめむ 僧正 遍昭
- 13 立身はお部屋とまでに寵愛の恋ぞつもりて淵
となりぬる 陽 成 院
- 14 女房の格気ふかさに出来心みだれせめにし我

- ならなくに 河原左大臣
- 15 せわしなき正月ものの綿入れてわが衣手にゆ
きはふりつつ 光孝天皇
- 16 子供らに留守をあづけて余所ありきまつとし
聞かばいまかへり来む 中納言行平
- 17 夏来ぬと金魚も市に立田川からくれなるに水
くくるとは 在原業平朝臣
- 18 吉原に居続け酒のもどり駕籠夢のかよひぢ人
目よぐらむ 藤原敏行朝臣
- 19 身上をすておきざりの女房に逢はでこの世を
過してよとや 伊 勢
- 20 やりて衆にぶたれ内証でせかれつつ身をつく
してもあはむとぞ思ふ 元良 親王
- 21 かげくらき二十六夜のたいこ持あり明の月を
待ち出つるかな 素性 法師
- 22 これはこれとはばかりちるも花なれやむべ山
風をあらしといふらむ 文屋 康秀
- 23 さびしさや新酒は酔のさめやすし我が身一つ
の秋にはあらねど 大江 千里
- 24 野も山も冬の衣をたつ田姫紅葉のにしき神の
まにまに 菅 家
- 25 のびねのまくらの数はかさぬとも人にしら
れでくるよしもがな 三条右大臣
- 26 ためになる客にこよひは貫はれていまひとた
びの御幸のまたなん 貞 信 公
- 27 子をすてもどる信太の親ぎつねいづみきと
てか恋しかるらむ 中納言兼輔
- 28 淋しさはきのふにけふのあすか山人目もくさ
もかれぬとおもへば 源宗干朝臣
- 29 煤はいて掃除しまひの油皿おきまどはせるし

- ら菊のはな 凡河内躬恒
- 30 鷹の夢からすの声にやぶられてあかつきばか
りうきものはなし 壬生 忠岑
- 31 いろも香も花の曲輪の八朔は吉野の里にふれ
るしら雪 坂上 是則
- 32 ひろ庭に遊べる鳥のあしあとはながれもあへ
ぬ紅葉なりけり 春道 列樹
- 33 洗濯のきぬほす棹をあらしにしてしづ心なく花
のちるらむ 紀 友 則
- 34 長生きもほどこそあらめ荒神の松もむかしの
友ならなくに 藤原 興風
- 35 かくばかり世帯じみても年明けの花ぞむかし
のかにほひける 紀 貫 之
- 36 ひとり旅野にふす我が友ならで雲のいづこに
月やどるらむ 清原深養父
- 37 鬼は外海は内へといり豆はつらぬきとめぬ玉
ぞちりける 文屋 朝康
- 38 おそるべきことは藪医に身をまかす人のいの
ちのをしくもあるかな 右 近
- 39 片時もおかれぬ夏のぼたもちはあまりてなど
か人の恋しき 参議 等
- 40 頬杖に夜昼となきむし歯やみ物やおもふと人
のとふまで 平 兼 盛
- 41 一の富ゆふべの夢のけんとは人しれすこそ
思いそめしか 壬生 忠見
- 42 生涯は天地乾坤渾沌未分す急の松山波こさじ
とは 藤原 元輔
- 43 後悔を先に立たせて老の坂むかしはものを思
はざりけり 中納言敦忠
- 44 河豚汁の堪忍ならぬ味ひは人をも身をも恨み

ざらまし

中納言朝忠

45 ふた親のゆるさぬ恋に義理立てて身のいたづらになりぬべきかな

謙徳公

46 金はなし年季はながし欠落はゆくへもしらぬ恋の道かな

曾根好忠

47 道とひによれど山家の留守がちに人こそ見えね秋は来にけり

惠慶法師

48 焼継にならぬ硝子のかんざしのくだけてものを思ふ頃かな

源重之

49 くらきよりくらき道なる鶺鴒火のひるは消えつつ物をこそ思へ

大中臣能宣朝臣

50 ぬひ仕事冬の支度の日の脚はながくもがなとおもひけるかな

藤原義孝

51 懈怠なく二日やいと親の慈悲さしもしらじなもゆる思ひを

藤原実方朝臣

52 枕二つならべてひとりぬる夜さはなほうらめしき朝ぼらけかな

藤原道行朝臣

53 住吉の松ならぬ身に待つ恋はいかに久しきものとかはしる

右大将道綱母

54 落ちてゆく君にあはづの別れ路はけふをかぎりのいのちもがな

儀同三司母

55 三つ俣に散る楓葉は今の世に名こそ流れてなほ聞えけれ

大納言公任

56 鞍がへの身にあだ人はつけのほせ今一たびの逢ふこともがな

和泉式部

57 花嫁の帽子のうちのゆかしさは雲がくれにし夜半の月かな

紫式部

58 めでたさやわらべにかへる老らくのいでそよ人を忘れやはする

大式三位

59 迷ひ子をたづねあぐみて茶わん酒かたぶくま

での月をみしかな

赤染衛門

60 星の恋年に一度のその後はまだふみもみずあまの橋立

小式部内侍

61 はみがきにとりまく人の七重八重けふ九重にほひぬるかふ

伊勢大輔

62 いかにせん目ざとい母のそばに寝てよにあふ坂の関はゆるさじ

清少納言

63 勘当の身は母親へねだりごと人づてならでいふよしもがな

左京大夫道雅

64 両国の花火一刻千金のあらはれわたるぜぜのあじろ木

権中納言定頼

65 誠なきものと知りつつ傾城の恋にくちなん名こそをしけれ

相摸

66 まだわかき春の心は咲く梅の花よりほかにしる人もなし

前大僧正行尊

67 捨ものと見限るまでも親の世話かひなくたたむ名こそをしけれ

周防内侍

68 真の闇提灯かりて戻らずば恋しかるべき夜半の月かな

三条院

69 短冊の竹の八日に流るるはたつたの川のにしきなりけり

能因法師

70 壁隣り小遣ひ銭のかしかりはいづくもおなし秋の夕ぐれ

良暹法師

71 稗蒨の鷲と案山子は一本のあしのまろやに秋風ぞ吹く

大納言徑信

72 活けにくき花にはな活けこかしつつかけしやそでのぬれもこそすれ

祐子内親王家紀伊

73 遠目がねはななき見ゆる安房上総外山のかすみたらずもあらなん

前中納言匡房

74 風巾若殿付ははる風のはげしかれとは祈らぬ

ものを

源俊頼朝臣

75 菊もはや杖つくまでに老いにけりあはれことしの秋もいぬのり

藤原基俊

76 はてしなき空をひたして五月雨の雲居にまがふ沖つしら波

法性寺入道前関白太政大臣

77 春の旅紀の路大和路道づれのわれてもすゑに逢はむとぞ思ふ

崇徳院

78 貫ひ乳に身幅もせまき親ごころいく夜ねざめの須磨の関守

源兼昌

79 あやにくに忍び逢ふ夜はとりわけてもれいづる月のかげのさやけさ

左京大夫頭輔

80 あさがほは夜半の嵐の吹きすさみ乱れてけさはものをこそ思へ

待賢門院堀川

81 舞鞠は松のこずゑにありやありやただありあけの月ぞのこれる

後徳大寺左大臣

82 嬉しいにつけ悲しいにつけ泣き上戸うきにたへぬは涙なりけり

道因法師

83 吸ものの紅葉は花の江戸に来て山のおくにもしかぞなくなる

皇太后宮大夫俊成

84 きぬぎぬのあかぬ別れは待ちわびてうしとみしよぞ今は恋しき

藤原清輔朝臣

85 待てど来ぬ君はいづくへゆきの夜にねやのひまさくつれなかるらむ

俊恵法師

86 鼻とほすまでにからしの利きすぎてかこちがほなるわが涙かな

西行法師

87 くじらよる浦の苦屋のにぎはひて霧たちのほるあきのゆふぐれ

寂蓮法師

88 野にも伏し山をも越えて旅やく者身をつくしてやこひわたるべき

皇嘉門院別当

89 ぬき足を手がひの犬にほえられてしのぶるこ

とのよわりもぞする

式子内親王

90 白雨のはれてしぼりのゆかた染ぬれにぞぬれ

殷富門院大輔

91 夜や寒き木賃の宿の囲炉裏端ころもかたしき

ひとりかもねん

後京極摂政前太政大臣

92 根のつかぬわれは藻にすむ虫ならで人こそし

らねかわくまもなし

二条院讃岐

93 翌日ありとけふを怠る人の身はあまのをぶね

鎌倉右大臣

94 秋もはや二十日いなかの月の霜ふるさと寒く

衣うつなり

参議 雅徑

95 折りくべて寒夜をしのご鉢の木はわが立つ袖

にすみぞめの袖

前大僧正慈円

96 うばたまのくろかみ山の白雪のふりゆくもの

はわが身なりけり

入道前太政大臣

97 いさひとつ桑名の里のはまぐりは燃くやもし

ほの身もこがれつつ

権中納言定家

98 よそめから見てくれがしのすずみ船みそきぞ

夏のしるしなりける

正三位家隆

99 待恋に更けゆくかねのあぢきなきよを思ふゆ

ゑに物おもふ身は

後鳥羽院

100 親のあるうち気のづかぬ有がたさなほあまり

あるむかしなりけり

順徳院

〔解説〕「絵本狂歌百人一首闇夜磔」一冊、写

袋綴大本。はじめに序あり、

狂歌百人一首闇夜磔自叙

味噌汁のみそ嗅きはいとふべし。狂歌は狂歌

くさきをもて狂歌ならんか。当世狂歌おこな

はれて、草かるわらべ花売る婆、神子も積子

もおしなべてひたすら此道にあそぶこと、こ

や我國のいさほしといはむ。かかるたのし時

に逢ひて、敢風雅の心なきは汐汲む担桶の底

なきに似たり。いでや古人の糟粕は舐るとも

此友垣のかき覗きは盲蛇の物におぢざる一趣

向、よしあしともに、難波がたみじかきなが

ながしき、まいてや辺土にひととなりたる身

の、こころあらあ敷島の所謂相馬の百官百

司ちから業にも腕づくにも速はぬ故は徒に月

の鼠そこ爰と喰かぢりたる仮名文字も手爾波

もあはじ島山の朝夕見なれし小倉山和哥を狂

歌に競たゆるにひとしければ、いとおほけな

きにしもあらぬは、友どちのすすめいなめど

もゆるさず、あしたに聞きて夕べには死すま

じ顔の歌形にも一百の首尾をこじつけあたら

ずといへども遠からずといへるころををも

て、その儘闇の夜の磔と題しちかつた畑をう

ないしか。わらひくさの種をまくものは鱗齊

一鱸戯述 丙子春日

とある

別名、「どうけ百人一首闇夜磔」「闇夜磔」

越谷山人編、芦原眉山画で、天保四年刊の板本

がある。いま、文政九丁亥年春、鏡斎写とある

本によつた。芝居百人一首と同様、小倉百人一

首の作者を出し、その歌の下句(四五句)同じ

くして替歌を詠んでいる。

鬼は外福は内へといり豆はつらぬきとのぬ玉

ぞちりける

文屋 朝康

頬杖に夜ひるとなきむし歯やみ物や思ふとひ

とのとふまで

平 兼 盛

いかにせむ目ざとい母のそばにねてよに逢坂

の関はゆるさし

清少納言

あやにくに忍ひあふ夜はとりわけてもれいづ

る月のかげのさやけさ

左京大夫頼輔

鼻とほすまでにからしの利きすぎてかこちが

ほなるわが涙かな

西行法師

ぬき足を手飼ひの犬にほこられてしのぶるこ

とのよわりもそする

式子内親王

いづれも江戸のわらいがある。庶民の中に入っ

ていった小倉百人一首と、これに添った狂歌の

百人一首はかなり多い。そしてその半は、百

人一首ではなく、一人百首であるが、小倉百人

一首に寄せてあるために「百人一首」の名を襲

っているのである。

狂歌と云つても、まっとうな詠み口の歌もあ

る。たとえば、

まだ若き春の心は咲く梅の花よりほかに知る

人もなし

前大僧正行尊

はてしなき空をひたして五月雨の雲居にまが

ふ沖つ白波

法性寺入道前白太政大臣

などのような歌も少くはない。又、教訓じみた

歌も見られる。

誠なきものと知りつつ傾城の恋にくちなん名

こそ惜しけれ

相 模

明日ありと今日を憚る人の身はあまの小舟の

綱手かなしも

鎌倉右大臣

親のあるうち気のづかぬ有がたさなほあまり

ある昔なりけり

順徳院

などが見える。案外もつもらしい作者であつ

たかもしれない。写本も多く、抜本もあつて弘

く行われたと思われる。

狂歌百人一首

太田南 敬詠
天保十四年八月刊

- 1 秋の田のかりほの菴の歌がるたとりぞこなつて雪は降りつつ 天智 天皇
- 2 いかほどの洗濯なればかく山で衣ほすてふ持統天皇
- 3 あし引の山鳥の尾のしたりがほ人麿ばかり歌よみでなし 柿本 人丸
- 4 白妙のふじの御詠で赤人の鼻の高ねに雪は降りつつ 山辺 赤人
- 5 鳴く鹿の声聞きたびに涙ぐみさる丸太夫いかに愁たん 猿丸 大夫
- 6 其のままにおく霜の句をかり橋の白きを見れば夜ぞ更けにける 中納言家持
- 7 仲麿はいかいはぶしの達者もの三笠の山に出でし月かも 安倍 仲麿
- 8 わが菴は都の辰巳午ひつじ申酉戌亥子丑寅卯治 喜撰 法師
- 9 衣通の歌の流義におのづからうつりにけりな女どしゆゑ 小野 小町
- 10 四の緒のことをばいはせみ丸のお歌の中にもの字四ところ 蝉 丸
- 11 ここまでは漕ぎ出でてけりと言傳てを一寸たのみたい海士の釣舟 参議 篁
- 12 吹きとぢよ乙女のすがたしぼしとはまだみれんなる宗貞のぬし 僧正 遍昭
- 13 みなの川みなうそばかり言ふなかに恋ぞ積りて澗はげうさん 陽 成院
- 14 陸奥のしのぶもぢもぢわがことを我ならなく
- 15 光孝と何かいふらむ君がため若葉をつめば忠義天皇 光孝 天皇
- 16 行平は狐の真似をしられけり松としきけはいまかへりこん 中納言行平
- 17 千早振神代も聞かぬ御趣向をよく詠みえたり在五中將 在原業平朝臣
- 18 とし行と云ふはもつとも住の江の岸による波顔による波 藤原敏行朝臣
- 19 なにはがたみじかき芦を伊勢ならばただ浜荻とよみさうなもの 伊 勢
- 20 わびぬれば鯉のかはりによき鮒のみをつくりてものまんとぞ思ふ 元良 親王
- 21 いまこんといひしばかりに出て来ぬは素性法師の弟子か師匠か 素性 法師
- 22 喰ふからにあせのお袖のしほるればむべ豆粥をあつしといふらむ 文屋 康秀
- 23 月みれば千々に芋こそ喰ひたけれわが身ひとりのすきにはあらねど 大江 千里
- 24 このたびはぬさも取敢へず手向山またその上にさい銭もなし 菅 家
- 25 三条の右大臣なら前にゐる河原の左大臣はなじみか 三条右大臣
- 26 小倉山みねのもみぢば心あらば貞信公に御返歌をせん 貞信 公
- 27 泉川いつみきとてがかね輔がとなりの娘恋しかるらむ 中納言兼輔
- 28 山里は冬ぞさびしさまさりける矢張市中がにぎやかでよい 源宗干朝臣
- 29 こころあてに吸はばや吸はむ初霜の昆布まど
- 30 在明のつれなく見えしわかれより曉ばかりおこる癩かな 壬生 忠岑
- 31 是則がまだ目のさめぬ朝ぼけに在明の月とみたる白雪 坂上 是則
- 32 質蔵にかけし赤地のむしぼしはながれもあへぬ紅葉なりけり 春道 列樹
- 33 久方の光りのどけき春の日に紀の友則がひるね一時 紀 友 則
- 34 誰をかも仲人にして高砂の尉と姥との仲よかるらむ 藤原 興風
- 35 人はいざごとも知らず貫之がつらつらつらとよみし故郷は 紀 貫 之
- 36 夏のよはまだ宵ながらよく寝ればげに鱧やぶと名をやいふらむ 清原深養父
- 37 風の吹く秋の野のみか滝つぼもつらぬきとめぬ玉ぞちりける 文屋 朝康
- 38 忘らるる身をばおもはず誓ひてし人のいのちのせわばかりする 右 近
- 39 徳利はよこにこけしに豆腐汁あまりてなどかさけの恋しき 参議 等
- 40 とどむれどよそに出にけりこむすこはうちにゐるかとのとふまで 平 兼 盛
- 41 めせといふわか菜の声は立ちにけり人しれずこそ春になりしか 壬生 忠見
- 42 清原の元輔といふ御名にてお歌は末の松山といふ 清原 元輔
- 43 又しても爺と姫とのくりごとむかしは物を思はざりけり 中納言敦忠
- 44 すく人のたえてしなくば真桑瓜皮をもみをも

かぶらざらまし 中納言朝忠

45 初がつほくふべき客は不参にてみのいたづら 謙徳公

46 由良のとを渡る舟人菓子をたべお茶のかはり 曾根好忠

47 八重むぐら茂れる宿のさびしさに恵慶法師の 恵慶法師

48 花みんともちしささへをぶちおとしくだけて 源重之

49 御垣守衛士のこく屁に能宣が鼻かかへつつも 大中臣能宣朝臣

50 めいていにすすこのわた味よくてながくも 藤原義孝

51 かくとだにえやはいぶきのさしもぐさなくば 藤原実方

52 あけぬればくる物とは御存知の道信どのも 藤原道信

53 酔ひつづれひとりぬる夜をあくるまはばかに 右大将道綱母

54 よみ歌のうへならばこそいふだあるけふを限 儀同三司母

55 滝の音は絶えて久しくなりぬるといふはいか 大納言公任

56 あらざらむ未来のためのくりごととに今一たび 和泉式部

57 名ばかりは五十四帖にあらはせる雲がくれに 紫式部

58 有あひのたなのささをば吞むときはゆでさや 大式三位

59 赤染が居睡りをしておつむりもかたぶくまで

の月をみしかな 赤染衛門

60 大江山いく野のみちの遠ければ酒吞童子のい 小式部内侍

61 いにしへのならの都の八重桜さくらさくらと 伊勢大輔

62 夜をこめて鳥のまねしはまづよしとせい少納 清少納言

63 今はまだ思ひ絶えなんとばかりを人伝ならで 左京太夫道雅

64 朝ぼらけ宇治の川辺に定よりがめをこすりつ 権中納言定頼

65 うらみわびほさぬ袖だにあるものをこの四五 相摸

66 眼と口と耳と眉毛のなかりせばはなよりほか 前大僧正行尊

67 春の夜の夢ばかりなる転寝にねちがひしたる 周防内侍

68 友もなく酒をもなしに眺めなばいやになるべ 三条院

69 あらし吹く三室の山のもみち葉はたつた今の まにちりうせにけり 能因法師

70 さびしさに宿を立出てながめたり煙草のんだ 良暹法師

71 夕されば門田のいなば音づれて権兵衛内なら 大納言徑信

72 赤飯をいざやくばらん鳥のふんかけしや袖の 祐子内親王家紀伊

73 高砂の尾上のさくら咲きにけりここからなり 前中納言匡房

74 とし頼はさむさも強し山おろしはげしかれと

はいのらぬものを 源俊頼朝臣

75 ふるがけをとりしばかりをいのちにてあはれ 藤原基俊

76 法性寺入道さきの関白を半分ほどでおきつし 法勝寺入道前関白太政大臣

77 焼きつぎにやりなばよしやこの徳利われても 末にあはんとぞ思ふ 崇徳院

78 淡路島かよふ千鳥のなくこゑに又寝酒のむす 源兼昌

79 頭輔がうつつぬかして雲まよりもれ出る月の 右京大夫頭輔

80 二印にすはむと思ふ地玉子のみだれてけさは 待賢門院堀河

81 ほととぎす鳴きつる方にあきれたる後徳大寺 後徳大寺左大臣

82 おもひわびさても命はあるものをうきに絶え 道因法師

83 鞆の皮筆毛の用にとりつくし山の奥にも鹿ぞ 皇太后宮大夫俊成

84 あともどりする世の中もあれかしなうしとみ 藤原清輔

85 夜もすがら物おもふ頃は明けやらであらうも 俊恵法師

86 何ゆゑか西行ほどの強勇が月の影にてしほし 西行法師

87 むら雨の道のわるさの下駄のはにはらたちの 寂蓮法師

88 難波江の芦のかりねの一夜たび皇嘉門院弁当 皇嘉門院別当

89 玉の緒よ絶えなば絶えねなどといひ今となつ

たらまづおことわり

式子内親王

90あと先の紀伊も讃岐も袖ぬれて殷富門院矢張り同断 殷富門院大輔

91きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに後京極殿寝たり起きたり 後京極撰政前太政大臣

92わが袖は塩みづふきしくきの石の人こそしらねかわくまもなし 二条院讃岐

93波風の常にかはれば渚こぐあまの小舟の船頭かなしも 鎌倉右大臣

94衣うつ音にびつくり目を覚ましとて第一つづる雅経 参議 雅経

95この広い浮世の民におほふとはいかい大きな墨染のそで 前大僧正慈円

96花さそふあらしの庭の雪ならでふりゆくものは牛の金玉 入道前太政大臣

97定家どのさてもききちく来ぬ人としりてまつの浦の夕ぐれ 権中納言定家

98風そよぐならの小川のゆふぐれに薄着をしたる家隆くつしやみ 正三位家隆

99後鳥羽どのことばつづきのおもしろく世を思ふゆゑにも思ふみは 後鳥羽院

100百色の御歌のとおしおしまひにももしきやとは妙に出あつた 順徳院

〔解説〕小本五十丁、内題「狂歌百人一首全」袋綴、外題「蜀山人詠狂歌百人一首」とあり。

刊記に「天保十四年八月、心齋橋通順慶町北柏原屋義兵衛刊。一面一人の狂歌。五十丁、百人の歌を狂歌に詠んだ。さすがに達者によまれてはいる。

達者にまかせて詠んではいるが、中にはやや

粗いところがある。

酔ひつづれひとりぬる夜のおくるまはばかに久しきものとかは知る 右大将道綱朝臣

とあるのは、道綱母のまちがいである。小倉百人一首のうたと作者をむこうにまわして詠んでいるので、そこにおもしろ味もある。いかほどの洗濯なればかく山で衣ほすてふ持統天皇

あしひきの山鳥の尾のしたり顔人丸ばかり歌よみでなし

なく鹿の声きくたびに涙ぐみさる丸太夫いかい愁たん

仲鷹はいかいはぶしの達者もの三笠の山に出でし月かも

吹きとちよ乙女のすがたしばしとはまだ未練なる宗貞のぬし

行平は狐のまねをしられけり松としきけば今かへりコン

千早振神代もきかぬ御趣向をよくよみえたり在五中将

今こむといひしばかりにいこぬは素性法師の弟子か師匠か

是則がまだ目の覚めぬ朝ほけに在明の月と見たるしら雪

久方の光のどけき春の日に紀の友則がひるね一時

八重もぐら茂れるやどのさびしさに恵慶法師のあくび百べん

まだ、後鳥羽院、家隆、定家、雅経、良経、殷富門院大輔、皇嘉門院別当、西行、顕輔、赤染

衛門など、全部で三割ほどもある、中にはほととぎす鳴きつる方にあきれたる後徳大寺

がありあけの顔

などと、有名になつたものもある。通していえば、あまり力を入れた作ではないと云えよう。わが庵は都のたつみ午ひつじ申とりいぬ亥子

丑とら宇治 喜撰法師

はうを呼び出すのに十二支を巽のたつ、みからはじまつて、十二支を一めぐりして終に來て宇治を出しているのとか、

眼と口と耳と眉毛のなかりせば鼻よりほかに知る人もなし 前大僧正行尊

は、「花より外に知る人もなし」の花を鼻にいかえた狂歌的機智。

さびしさに、宿を出ちいで眺めたり、煙草のんだり、茶を煎じたり 良運法師

高砂の尾上のさくら咲きにけり。ここからなりと見つ飲まばや 前中納言匡房

古掛けを取りしばかりをいのちにてあはれ今年商ひもなし 藤原 基俊

などは、狂歌の振りを得たものであろう。狂歌が庶民の中に入って行くためには、必然的に口語が取り入れられるのであつて、

百色の御歌のとおしおしまひにももしきやとは妙に出合つた 順徳院

山里は冬ぞさびしきさまさりける矢張り市中にぎやかでよい 源宗千朝臣

夜をこめて鳥のまねしはまづよしと清少納言よく知つてゐる 清少納言

おかげ 百人一首

撰者 不詳
文政十二(一八二九)年刊

- 1 秋の田のかり穂も多く国々のおかげ参りに家内連れつつ 天智 天皇
- 2 春もすぎなつきにけらし白妙のかほもほすてふくらがりの山 持統 天皇
- 3 親の手をついにはなれぬ稚子のおかげ参りは独かもねん 柿本 人丸
- 4 玉造にうち出てみれば白たへの餅の施行や銭はふりつつ 山辺 赤人
- 5 おく露の道ふみわけて参宮の声きく時ぞけさは早起 猿丸 太夫
- 6 笠をきて通る娘のおもぎしの白きをみれば皆ぬげにける 中納言家持
- 7 けんざきのふりさきみれば春日なる三笠の山ほど出でし参宮 安倍 仲麿
- 8 我庵はけさ程たつに宿屋つむ跡へもどると人はいふなり 喜撰 法師
- 9 のみしらみうつりにけりな着の儘におかげ参りは雑魚寝せしまに 小野 小町
- 10 これやこの鄙も都もほどこそせど施行のかずは大坂が関 蝉 丸
- 11 稚子もわらんずかけて参りしと親には告げよ下向する人 参議 篁
- 12 宮川の舟の通ひ路いそぐなよせりこむ姿しはしとどめむ 僧正 遍昭
- 13 宇治橋の上よりおつる五十鈴川銭ぞつもりて山と成りぬる 陽 成院
- 14 道のりのほどさへ知らず誰の世話下向する子

- 15 人のため門中に出て茶をばくむ我が接待に施主はつきつつ 光孝 天皇
- 16 立ちわかればぐれたつれも御師の宿ことし聞かば今たづね来む 中納言行平
- 17 千はやふるかみの幟をもつはむべからくれなるのしるしかくとは 在原業平朝臣
- 18 諸国から伊勢によるからよるさへやねぎの通ひ路人のつむらむ 藤原敏行朝臣
- 19 御請けかともじかき夏の夜の目もあはで此の夏ぬけ出でよとや 伊 勢
- 20 古いぬれど今はた同じ坊主なる身はかづらにて行かんとぞ思ふ 元良 親王
- 21 今こんと言ひしつれをば有明の安当寺町に待ちいづるかな 素性 法師
- 22 あしよわに神の御かげの有りぬればむべ山道もかるしといふらむ 文屋 康秀
- 23 ゆみぶしのかかるものこそかなしけれ我身独の留守にはあらねど 大江 千里
- 24 此の度は何もとりあへず抜け参り前だがけのなりのまにまに 菅 家
- 25 名にしおはば大坂程の施行にて下向するまであるよしもがな 三条右大臣
- 26 おくりくる人もぬけたき心あらば今より参れ連とならん 貞 信 公
- 27 昔からわきておかげの御扱ひは是非ふるとてかふしぎ成るらん 中納言兼輔
- 28 山里は日々客こそまさりけり宿屋もどことも行けぬと思へば 源宗行朝臣
- 29 心あてにからばやからむ初旅のおきまどはせ

- 30 ただひとりつれなく見えし抜参り杓ふるばかりうきものはなし 壬生 忠岑
- 31 天てらす神の使いとみるまでにここやかしこにふれる御はらひ 坂上 是則
- 32 山川にはしをかけたるしがらみはながれもさせぬ助けなりけり 春道 列樹
- 33 両具なし光のどけき春の日と賤ころなくぬけて行くらん 紀 友則
- 34 誰をかも知る人にせん伊勢参りそろへの外の友ならなくに 藤原 興風
- 35 旅はいさ心もしらず古市にはなぞ一夜のちぎり成りける 紀 貫之
- 36 ぬけし子の親は宵から明くるまでけふはいづくに宿やとらん 清原深養父
- 37 しらざりしおやはきびしくひとたびはさへぎりとめぬ玉造口 文屋 朝康
- 38 叱らるる身をば思はず抜けいでし人の心のあさくもあるかな 右 近
- 39 相の山お杉お玉に調子づきあまりてなどかたらぬ散銭 参議 等
- 40 しぶなれどやりに出にけり此の度は発起したかと人の問ふまで 平 兼 盛
- 41 抜参り伊達こぎの名は立ちにけり人知れずこそ浴衣染めしか 壬生 忠見
- 42 かへりきなかたみに人におされつつくらがり峠ゑゑこさじとは 清原 元輔
- 43 逢見ての今の心にくらぶればむかしにまさるおかげなりけり 中納言敦忠
- 44 此の事のしれてしあらば伊勢道の人をも我も

- あわてざらまし 中納言朝忠
- 45ぬけるともいふべき人は抜けやらで是れも御請によりぬべきかな 謙徳公
- 46施しをあてにする人めしをたべ行方もしらぬ旅の道かな 曾根好忠
- 47伊勢参り留守もる宿の淋しきに人こそ見えね酔は来にけり 惠慶法師
- 48銭ををしみ岩ほどかたいおのれさへくだけで物をやる心かな 源重之
- 49施行宿めしをたく日の夜は留めて銭をやりつつ人をこそ思へ 大中臣能宣朝臣
- 50たんと米たくはへざりし宿やさへ永くもがなと祈りけるかな 藤原義孝
- 51かくとだにえやは合羽に杓かさやさしもしらじなされる思ひを 藤原実方朝臣
- 52施しをうけるものとは聞きながらちと恥かしき初乞食かな 藤原道信朝臣
- 53野に寝つつ草の枕の明くる間はいかに不自由な物とかは知る 右大臣道綱母
- 54施しの行く先まではかたければ杓をかざりの荷物ともが 儀同三司母
- 55おかげどしたへて久しくなりぬれどお板ふると又きこへけれ 大納言公任
- 56あらざらむこの世の外の年寄りが又の御かげにあふこともがな 和泉式部
- 57めぐりあひて見しやそれともわかぬ連又はづれにし人群集かな 紫式部
- 58参らむかいなやと伊勢の風吹けば出そよ人に誘はれぞする 大式三位
- 59やすらはでねもせず道を夜通しにくらがり峠跡に見しかな 赤染衛門
- 60伊勢までは幾里の道の子を抱きてまだふみもみぬ嬾と嬾づれ 小式部内侍
- 61いせ参り奈良の宿屋へおしかけて皆この家に泊りぬるかな 伊勢大輔
- 62それと見てたとへ座敷はつまるともよも大坂の客は捨てまじ 清少納言
- 63今はただ家内ぬけたといふばかりを宿がへならでさす時節かな 左京大夫道雅
- 64おかけぞと阿波から和泉だんだんにあらはれわたるいせの御利生 権中納言定頼
- 65亭主わびろくに風呂だになき物を足も朽ちなん湯こそほしけれ 相摸
- 66路銀をも持たで裸のぬけ参り腹よりほかに減るものもなし 前大僧正行尊
- 67杓と笠買ふばかりなるひとり住み着の儘たたん身こそ安けれ 周防内侍
- 68心にもあらで下人を参らせばよろしかるべき家の御祈禱 三条院
- 69あらかなしみな約束の友達は立つたと聞けば気もいらちけり 能因法師
- 70淋しきはこちばかりかと尋ぬればいづくも同じ参宮の留守 良暹法師
- 71夕されば門にうろつく抜参りうらの空家に皆留めぞする 大納言経信
- 72音にきく施行はすれどみな恩にかけじや袖の濡れもこそすれ 祐子内親王家紀伊
- 73さげ札に隣も施行だしにけり此の町からも出さずはあらなん 前中納言匡房
- 74ぬかりける人もぬけしか親方のはげしかれとはいのらぬものを 源敏行朝臣
- 75飼ひおきしあるじも知らず不思議にてお板うけて犬もいぬめり 藤原基俊
- 76二軒茶屋打出て見れば参宮の施行をもらふ押しつおされて 法性寺入道前関白太政大臣
- 77あすはやみ立つとせかるる仕立やがなんでも御まに逢はんとぞ思ふ 崇徳院
- 78だまされて残した兄のなくこゑに幾夜ね覚めぬ内のでておや 源兼昌
- 79有明の月をたよりに夜の間に抜出る人のかげのさやけさ 左京大夫顕輔
- 80いづ方のものともしらず黒髪の乱れてあれば結うてこそもらへ 待賢門院堀河
- 81ひがしへと行きつる方を眺むればただ菅笠の月ぞならべる 後徳大寺左大臣
- 82思ひきやさても時節になるものを参りたえぬはおかげなりけり 道因法師
- 83世の中よ鬼こそなけれ迷ひ入る山の奥にもただとめてやる 皇太后宮大夫俊成
- 84ながらへば又此の度も参るのに留守をする身のむかし恋しき 藤原清輔朝臣
- 85夜もすがらこしらへ出来て明けやらぬ六つ前から連来たりけり 俊恵法師
- 86はしれとて誰かは道をいそがするかけ落がほなる抜参りかな 西行法師
- 87白むしの露もまだひぬ竹の皮に湯気立ちのぼる又にぎりめし 寂蓮法師
- 88ひとへもの皆はんてんの揃へさへ身をやつしてや抜け参るべき 皇嘉門院別当
- 89足よわよ抜けなばぬけよいきのりにくらがり

峠よわりもぞする

式子内親王

90 見せばやな日和続きに下向してやけにぞやけ

し色は真黒

殷富門院大輔

91 乳呑児の泣くや宿屋の入ごみに誰ともしらず

だかれても寝む

後京極摂政前太政大臣

92 我が子供けがさへせぬは長の旅の人こそ知ら

ね守る神徳

二条院讃岐

93 淀川に常にもがもな施主ありて下りの舟のた

だで乗せしも

鎌倉右大臣

94 つひに出ぬ内の娘子けさ抜けて古里とほく伊

勢にゆくなり

参議 雅徑

95 おほけなく伊勢路は今にきらふかなわが神国

に墨染の袖

前大僧正慈円

96 連さそふおかげの空の雪ならぞふりゆくもの

は伊勢のおはらひ

入道前太政大臣

97 来ぬ人を待てと松坂その世話をやくや子供に

気ももまれつつ

権中納言定家

98 風そよぐ奈良の宿屋の夕ぐれはのぼりぞ連の

しるしなりける

正三位家隆

99 人もよし我も嬉しく惜しげなくかけ思ふゆゑ

に物恵む身は

後鳥羽院

100 百敷や尊き宮居は仰ぎても猶あまりある御か

げなりけり

順徳院

〔解説〕「御陰百人一首」布目表機袋綴中本刊

一冊。撰者不詳、序跋なし。文政十二庚寅年閏

三月新板、浪華一幹亭藏。おかげ参りは、家人

や主人に許しを得ず、路銀を持たずに家をぬけ

出し、沿道の人々の喜捨、施行によつて、伊勢

の皇太神宮に参詣することで、一に「ぬけまい

も続いた風俗であった。この書は大阪の出版で、関西、中国のぬけまいりを詠んでいる。「蚤虱うつりにけりな」「ちと恥かしき初乞食」などおかげ参りの苦勞を云つたり「路銀をも持たで裸のぬけ参りか腹よりほかに減るものもなし」などのん気にかまえたものもある。「阿波から和泉」「奈良の宿屋へ」大阪、淀川、など関西の地名が出ている。関西の読者を考えている。歌は小倉百人一首のもじりであり、小倉の作者を出して、一人の作者が詠んだもの。この上方板の「御影百人一首」に対して、江戸の板の「御影百首」ともいうべき「同行百人一宿大土佐草」という書がある。大坂や藤助梓行とあるが刊年は不明である。はじめ口絵、六玉川にもじつた「六生川」があり、各詞と歌をのせる。歌、小股でも猶とびこさん山伏のはなとつれそふいせの川々(出の生川)さても損うち茶釜はさびが出ていろりの鍋もぶちわれにけり(罰の生川)松風の菓子だに旅はあぢなきにうどんうつなり山中の里(往來の生川)常滑やでかす手づくりてつかちにちやかしの人の濃い茶器やなど(手作の生川)夕さればしほしほとして宿六ののらのなまかはひとりねるなり(独の生川)わすれてやそめもせざらむ旅だちのまにあひかねし玉川小紋(紺屋の生川)などあり、「小田原評定旅中こじ付方」などあって序がある。

東西東西おかげ御繁昌に付きまして新作あまた出ます間、私店にても何がな一部出来致度、作者仙果へ申付ましたる処、あるお家に抜参おかげ百人一首と申す、明和八年出来の本をお持伝へなさりました。それを借りうけ画像を添へ、口画と頭書きをあらたに補ひ、さつそく書きくれましたござります。もとより未熟な作者のこと、殊にいたつての急作ゆゑをかしくも何ともなく、ふぬけのやうな画本ながら、ぬけたぬけたは御影の吉相、ごひいきなされ、沢山に御用仰付られ下さりませ尤も百人のうち大かた抜参り仕り、ここにはわづか出勤仕りました。さやうにござら下さりませう。板元敬白

に至つてはまことに人を食つたものである。百人一宿は百人一首のもじりであるが、出すところ、天智天皇以下順徳院に至る首尾は全きに似て実は二十八人を出すだけである。他はぬけ参りに出かけたというのである。かしら書きのはじめに「事の起原」に、

おかげまゐりといふことの起りは、むかしは宝永二年酉閏四月大坂よりはじまり、その後明和八年初四月、又ぬけはじめて大にぎはひ、すべて今度に異ならず。

と記している。次に二十八人の歌をのせる。

1 麦秋のかりほを捨てて走りゆくおかげ参りは
あせにぬれつつ 天智 天皇

2 春すぎて夏日にてられぬけまゐり子供おぶて
ふあまや鼻まで 持統 天皇

3 親の手をつひに離れぬ稚児もおかげ参りにひ

- とりかも寝ん 柿本 人麿
- 4 伊勢路へと抜け出てみれば白妙の餅の施行
やぜにはふりつつ 山辺 赤人
- 5 おく様はもみぢ袋もなくしかも湯さへつかは
ぬ旅ぞわびしき 猿丸 大夫
- 6 笠買うてわたす娘のおもぎしのしろきをみれ
ばついて行きたい 中納言家持
- 7 剣ばらひふりさき見れば春日なる奈良をとま
りといでし人かも 安倍 仲麿
- 8 われいちど俄の旅に日数へてようぬけたりと
人はいふなり 喜撰 法師
- 9 のみしらみうつりにけりな徒におかげ参りと
雑候寝せしまに 小野 小町
- 10 これやこの鄙も都もほどこそど施行の数は大
坂がせき 蟬 丸
- 11 をさな児もわらんずがけて参りしを親にもつ
げよ下向する人 参議 篁
- 12 天つ風雲の通ひ路吹きとちよふる御故をしほ
しとどめむ 僧正 遍昭
- 13 道のりも知らず二日や三日にて下向する子は
我ならなく 河原左大臣
- 14 ひとの為かど口に出て茶をぞくむわが接待に
施主はつきつつ 光孝 天皇
- 15 千早振かみの幟を立田川唐くれなるの合印し
て 在原業平朝臣
- 16 今こんといひしばかりに長々とありたけの連
を待ち出づるかな 素性 法師
- 17 此の度は何もとあへず抜け参り前だれかけ
をしたるまにまに 菅 家
- 18 天照らす神の使ひと見るまでにここやかしこ

- に降れるおはらひ 坂上 是則
- 19 ぬけ参り伊達こぎの名はたちけり人しれず
こそ浴衣染めしか 壬生 忠見
- 19 施しを受くるものとは聞きつれどちとはづか
しき町はづれかな 藤原道信朝臣
- 21 あんずれば又出ることかたからんけふをか
ぎりぬけまゐりせし 儀同三司母
- 22 はじまるは宇治からやはた難波瀉頭はれわた
る伊勢のごりやく 権中納言定頼
- 23 いたづらは夢ばかりでも手枕に不義してぬけ
ぬ名こそをしけれ 周防 内侍
- 24 高札で隣はせぎやう出しにけり此の町からも
たてずはあらなん 前中納言匡房
- 25 見せばやな日和つぎに下向してやけにぞや
けし色はまつ黒 殷富門院大輔
- 26 来ぬ連を待ちつ尋ねつせわばかりやくや子供
に気はもまれつつ 権中納言定家
- 27 人もよし我も嬉しくおふけなくほどこそすゆゑ
にむくい得る身は 後鳥羽院
- 28 百敷や古きにかへる伊勢まゐり猶あまりある
めぐみなりけり 順 徳 院
- 右全歌を挙げたが、すぐ気付くことは、おかげ
百人一首と関連の深いことである。人丸、小
町、蟬丸、篁、光孝天皇、菅家、忠見、是則、
匡房、殷富門院大輔十人までが多少字句がちが
つても、全く同じ歌であり、
- 伊勢路へと抜け出てみれば白妙の餅の施行
やぜにはふりつつ 山部 赤人
- が、御影では、上句「玉造にうち出てみれば」
となつて下句は全く同じ、

施しを受くるものとは聞きつれどちとはづか
しき町はづれかな 藤原道信朝臣

とあるのが、御影では
施しをうけるものとは聞きながらちと恥かし
き初乞食かな 藤原道信朝臣

はほとんど想としては同じものと云えよう。
大坂で出版された「おかげまいり百人一首」
は、文政十二年の出版であり、「同行百人一首
大土佐草」は、大坂屋藤助梓行とあつて、刊年
が明らかではないけれど、大坂板行のものによ
つて、これよりあとに、江戸で上梓されたもの
である。当時、ぬけまいり、とかおかげまいり
とか云つて、相当民間に行われており、近所近
辺にも家族にも云わないで、ぬけ出して、伊勢
にまいるのである。真淵が宣長への書状の中で
「ぬけまゐりのやうにして江戸に」来ないかと
逢いたがつた文章を読んで、感動したことを思
い出す。江戸から人々がぬけまいりをするのに
伊勢から江戸へ「ぬけまいり」のようにして来
られないかと云つたのである。当時多く行われ
たことが知られる。私が故郷（岐阜県）に居た
五十年ほど前にもお伊勢様と、善光寺様におま
いりするのが、庶民の願ひであつて、「ぬけま
いり」の言葉は聞き知っていた。ぬけまいりは
大阪におこつて江戸にまで及んだ由が書かれて
いるが、宝永二（一七〇五）年にはじまり、明
和八（一七七二）年に又盛んになったといひ、
その本によつて、さし画と頭書を改めたものが
これだと云う。序にある物の本書き仙果は、嘉
永頃多くの異種百人一首を著している。

校 道戯百人一首

山東京伝撰
仙鶴堂刊(未詳)

- 1 秋たちてかほどに稲のとれるあてに我が子ど
もらを露にぬらさじ 天智 天皇
- 2 あれこれとなつけにけらししみと子供欲
しがるひまなかかさま 持統 天皇
- 3 あぢよきは山盛りうどんしたたかに長々しく
も独りすすらむ 柿本 人麿
- 4 足袋のうらに踏みつけみればしまったり瓜の
種じやと云うてふきつつ 山辺 赤人
- 5 奥様の紅絹のふり袖なくしたとかうした時ぞ
ああやかましき 猿丸 大夫
- 6 傘さしてわたせる菓子におこし飴じろりと見
れば粉ぞふりにける 中納言家持
- 7 あまりなら振り酒みよかかすかなるおかさ
やつと出でしつぎかも 安倍 仲麿
- 8 わか魚をみんなで買つて汁にするよいうりや
うと人はよぶなり 喜撰 法師
- 9 はなのいろはうすらぎけりないたちにもわが
身ようなる長寝せしまに 小野 小町
- 10 これやこがゆでてかけよかわるか汁も汁
粉も大方の出来 蝉 丸
- 11 綿のぼるやつと暇かけてこしらへぬと人には
継ぎのあらぬつじつま 参議 篁
- 12 あまかれと食へよかはりの玉子とちおさめの
酢だこしかとすすめむ 僧正 遍昭
- 13 継きはぎを皆よりあうてみなな川尺ぞつもり
てばけとなりぬる 陽 成院
- 14 みちの木でころぶ餅売り泥ゆゑにみんなそん
して我はかなく 河原左大臣
- 15 義理がためはなして出れば馬鹿なつら我が子
どもらがいきをややつつ 光孝 天皇
- 16 立ちどまりいとやのおやま店にをれるまた通
りなば糸かひに来む 中納言行平
- 17 近くよる紙くづ買ひにたるかはうからくりな
んだ見てくりやうかい 在原業平朝臣
- 18 難波だこ短かきあしの太きのを生でこのまま
酔もつけずとや 伊 勢
- 19 佗びたとて今またおなじなまけやる気をつつ
しみて買はぬと思やれ 元良 親王
- 20 今ごんといはせしばかり長講義ありたけのつ
みを持ちるたるかな 素性 法師
- 21 ふみの江の君によるならよるゆゑやよめのか
ちにげ人のにくまむ 藤原敏行朝臣
- 22 ぶつからに飽きの来た気の知れぬればなせ山
のかみ親父といふらむ 文屋 康秀
- 23 抱きみればちちにままこそたしなけれわが身
ひとりの餓鬼にはあらねど 大江 千里
- 24 子のためはよそもとりそへてためてやるもと
での欲しき金のまだまだ 菅 家
- 25 なんじをば大酒のみのはねだされひとり二人
でくらはしもがな 三条右大臣
- 26 神楽舞ふみこの目もとに心ありて今一さしの
身ぶり待たなん 貞 信 公
- 27 酒のはら起きてのまるる水の数いつのむとて
も苦しまるらむ 中納言兼輔
- 28 やまひだけ冬ぞ寒さもまさりける人目も恥も
いらぬとおいらは 源宗千朝臣
- 29 こなたあてにおいらはおかぬ質物のさきまど
はせよしれぬ気のあな 凡河内躬恒
- 30 荒やけのつよくもふりしわかれよぎあかつき
ばかりぶきなものなし 壬生 忠岑
- 31 汗だらけありたけのほねとみるまでによしな
きさとにくれるしらかみ 坂上 是則
- 32 やりくりの金に借りたる質物は流すもつらき
もとで無ければ 春道 列樹
- 33 親方の叱りののしるばかな気につころもな
く腹のたつらむ 紀 友則
- 34 樽をもて知る人にせん誰がためのかつうはお
なじともになされて 藤原 興風
- 35 人のいざとつちは知らず色里は鼻毛むしられ
顔を見にくる 紀 貫 之
- 36 待宵はまだよいけれどあけられてきものいれ
るにつればやらかす 清原深養父
- 37 しもつきに風の吹きしく朝のまはつらふきと
うれきもぞちりける 文屋 朝康
- 38 あてらるる身をばをしまさずくらひてし人のい
やるのをかしくあるかな 右 近
- 39 朝茶うけのどのすき腹しぶければ余りてなん
と人に食はせき 参議 等
- 40 霜ふれど芋に出にけりわが声は芋や買はうと
人のとふまで 平 兼盛
- 41 恋ひすぎて我が身ははだかたちのまま人しら
ずこそおもひくやしな 壬生 忠見
- 42 契りかけしかたみの袖をすみづきん末をまつ
のはなごござるぞや 清原 元輔
- 43 味みての後のこはだにくらぶればいしはぬ
たにのむは酒なり 中納言敦忠

- 44 しゃうことの絶えて暇をばながに我をも
子をもうられざらまし 中納言朝忠
- 45 あまれども食ふべきものは惜しまれて身のい
やしきに悔むべきかな 謙徳公
- 46 裏の子のたてるひひなの菓子をかひつく音た
かき草の餅かな 曾根好忠
- 47 八重なりの汁粉ばかりの甘ければ人こそ食は
めあきず来にけり 惠慶法師
- 48 腹をいたみいま初産の乳房のみふくめて餅を
思ふことかな 源重之
- 49 とかくもりととが抱く子の昼はほえ夜はすね
つつわやをこそ云へ 大中臣能宣朝臣
- 50 親のため年よらざりし身なれさへ若きうちに
しつとめけるかな 藤原義孝
- 51 泣くとだに親はくすりの切りもぐささしも叱
りなすうる思ひを 藤原実方朝臣
- 52 まけぬれば売れぬものとは知りながらなほお
そろしきかけ値なるかな 藤原道信朝臣
- 53 なまけつつひとり居る日のあくびにはいかに
久しき春の入相 右大将道綱母
- 54 わが金はいく日までぞと貸しけれど今日を明
日とてのばしけるかな 儀同三司母
- 55 琴のねは絶えて久しく聞えぬにうたぞひかれ
て猶きこえけれ 大納言公任
- 56 散らざらむこの木のほかのおもひれに今一枝
を折ることもがな 和泉式部
- 57 名告りかけてみしやそれともひかぬまに逃げ
かくれなく運のつきかな 紫式部
- 58 ねりま馬みなの大根をひきゆけば見せかふ人
をまちて買はする 大式参位
- 59 やしよくとて呼ぶまじものをよびかけて三味
ひくまでのげいをみしかな 赤染衛門
- 60 大家さま呼びゆく人の遠ければまだ河豚も煮
ずあまが膳立て 小式部内侍
- 61 いにしへのならぬ親子のいとなみにようこ
までもしたひぬるかな 伊勢大輔
- 62 夜をこめてともにそら寝はしたれどもよに大
酒のかけはゆるさじ 清少納言
- 63 ひまはただ共にあそばむとばかりに敷入りな
らでつるよしもがな 左京大夫道雅
- 64 ぶさだらけうち金切れ絶えだえにあまさず
わたす銭のありたけ 権中納言定頼
- 65 からみかけ酒と蕎麦きりふるまはむここでく
はなん銭ぞをしけれ 相摸
- 66 もろとももの稼ぎと思へのり売りの花うりほか
による人もなし 大僧正行尊
- 67 春の日の嫁ばかりなる寺参りぜひなくつれて
うばぞいでける 周防内侍
- 68 ところにもあはでたなをば替へぬれどくるし
かるべきうばがつかかな 三条院
- 69 草鞋はく身延の山のまうではたてはのかた
き知識なりけり 能因法師
- 70 三味線にいとをたえせず弾きぬればいろけも
おなじあとの遊興 良暹法師
- 71 夕さればかかとのひびの痛まれて足のまはり
をあきれてぞふく 大納言経信
- 72 音にきくおかしなあまのあだ名にははげしや
袖のふりもこそすれ 祐子内親王家紀伊
- 73 大黒の甲子ならちやたきにけり豆腐のぐつ煮
足らずもかへなん 前中納言匡房
- 74 よかりける人にくはせしあまほうししぶくあ
れとは思はぬものを 源俊頼朝臣
- 75 ちびちびはさてもまだるし濡れ手にて粟つか
もとは虫のいいなり 藤原基俊
- 76 ぬたの腹飲みいでみれば親方の来るに間もな
く大き叱られ 法性寺入道前関白太政大臣
- 77 気をはやみ夜昼となく稼ぎなば枯れても末に
咲かんとぞ思ふ 崇徳院
- 78 あはれ知るかよふ乳もらひの泣き声に幾夜の
寒き親の抱き守り 源兼昌
- 79 秋風の七夕さまの短冊にもちそめる露のかげ
のかはゆき 左京大夫頭輔
- 80 なのりいでてとる手も知らずくるからだ踏ま
れて今朝は物をこそ食はね 待賢門院堀河
- 81 程すぎて泣きつる顔をながむればまだあいそ
うのつきもなかれず 後徳大寺左大臣
- 82 ねがひわびさては祈りはあるものをよぎにた
すけば仏なりけり 道因法師
- 83 身の中よおちこそなけれ尋ねあふえどのおく
にもうばぞありける 皇太后宮大夫俊成
- 84 なかむればまた狩人や忍ばれむ雉子とみしま
にいつかこんせず 藤原清輔朝臣
- 85 余所ながらも思ふ桶はあけやらぬ屋根の古
きぞつれなかりける 俊恵法師
- 86 なんぎさて月夜に鍋のおともせずかはり買う
なる我が涙かな 西行法師
- 87 くらずみのつちもまだひぬ窓の戸にきりりと
たてるあとの夕ぐれ 寂蓮法師
- 88 浪間江の穴の蟹めが人ゆゑに身をつられても
はひわたるかな 皇嘉門院別当

89 猫の子よくるはば狂へじやらしてもしりふり
ながらよわり声する 式子内親王

90 着せばやな子供のはせ小袖だもぬれにぞぬ
れし寝小便もらしつ 殷富門院大輔

91 葦なくやしまひの三文四文に子供かひとりひ
とりのかねに 後京極権政前太政大臣

92 我徒では師走に見えぬだけの意地人ことしら
ねかつてまたなす 二条院讃岐

93 不忍はつらせぬ鴨の夏は来ずあまた子供のつ
れてたのしむ 鎌倉右大臣

94 みうしなふ屋根のあさ霜ゆきふけてぶるぶる
寒く転びうつなり 参議 雅経

95 王手なく不器用なたちのおぼえかなわがさす
駒のつきとめの歩で 前大僧正慈円

96 棚さがす皿鉢の鯖の猫ならば撲ちゆくものは
馬鹿めなりけり 入道前太政大臣

97 此の人をまつびらどらの言ひわけにやとやも
しもの身をひかれつつ 権中納言定家

98 稼ぎよくなんのおらが言ふ事かみそかぞな
さぬしようちなりけり 従二位家隆

99 ちともうしちとも盛られし小豆粥よく食はう
ゆゑにゆをのまふ身は 後鳥羽院

100 ももじりやふるきのしめのしまひには猶へば
りさく昔ものなり 順徳院

(解説)「道化百人一首」(題簽)袋綴中本刊。
表紙人物、紅葉を配する。仙鶴堂刊。撰者山東

京伝。江戸中期刊か。小倉百人一首もどき。近藤清春作の、本歌なおし「道化百人一首」を宗として江戸時代に刊行された「道化百人一首」は、ほとんど、その挿絵を代えるだけで、歌は

大同小異である。そのうち最も字句の相違の多い本を取上げた。山東京伝の自序あり。「巻頭職人八景」と題して一頁を二つにわけ各近江八景になぞらえた。歌と職人の画を出した。京伝の戯作か。

この道化百人一首は、27・41・43・45・46・50・51・58・59・61・62・63・65・67・68・70・73・74・89は、近藤清春の道化百人一首にほとんど一致し、その他も想をとり、詞句を襲つたものが多い。

跡見学園蔵の「道化百人一首」の、挿画をかえて上梓された本が、幾種かある。

A、寛政二庚戌歳八月日、書林本ざい木町一丁目、西宮新六版。中本、(本文清春のとはとんと一致)はじめに、兩國八景の俳句を出す。本文一頁四つわりがさし絵と歌を出す。

B 表紙裏道外とあり。下を三分して
心がけ子にもあつばれ知らせけりしきたち
さかりよきにいふなり 西行 法師

みがかでははてもこひぢもなかりけりいらぬとなりてあてをいふなる 藤原 定家
くやしきはそのいろいろにかかれけりは□

□□ままにさけのぐひのみ 寂蓮 法師

新古今三夕の歌をもじつてかかかかかかかか一頁を四分して歌とさし絵を出す。歌詞清春本と大同小異。

C、道化百人一首絵抄。二種二本あり。中本題簽なし。表紙うらに題名あり。富士見西行を出す。本文、各頁四つにわけて歌と挿絵をかかせる。歌は近藤清春と大同小異。

D 道化百人一首、中本、青表紙に題簽あり。表紙うら、「我三人」(わがさんにん)、和歌三神をもじった。人麿、玉津島、赤人の歌をもじつて出す。本文一頁四つ割、各歌と画を出す。

生だこの短かき足の太きのを生でこのままくうてみよとや 伊勢

神楽舞ふみこの乙女に心あらば今一さしの袖を待たなん 貞信 公

宿おりに義理のかけたる質物は流すもつらき小袖なりける 春道 列樹

人はみな恋ぢも知らで色里は春ぞゆかしの顔をみにくる 紀貫之

忍ぶれど顔にいでけりわが酒はもしやたわけと人のいふらん 平兼盛

あらざらん布の中よりかのこと思ひ出し今一きれのある事もかな 和泉式部

にぎり持ちしお薯がすじはいくらともあきれはてたるばかりなるめり 藤原基俊

みせばやな年まのあまが恋だにもぬれにぞぬれし色はかはらじ 殷富門院大輔

などの詞句、清春のとかわつてゐる。

図書総目録によると、近藤清春本のほか、「どうけ百人一首」は、勸善堂春水の一名教化道化百人一首。文化五年版の一名、風流絵入矢

舎どうけ百人一首。享和四年版、新撰戻理道外百人一首。愚山人の串戯百人一首。享和四年版

山東京伝の道外百人一首。道外百人一首絵抄、山東京伝などが見える。最後のは前に掲げた本

にあたるのであろう。跡見本はそれらの中に入るであろう。

男女 教訓 百人一首宝蔵

撰者不詳 天明七(一七九七)刊

- 1 あきはてて親の意見をきかざれば菰をかぶりて雨に濡れつつ 天智 天皇
- 2 春すぎて夏も遊んでゐる人はものはかかいで頭かくやま 持統 天皇
- 3 足もとを見ずに履き物はきちがへ粗相ものじやと人はいふなり 柿本 人丸
- 4 たしなみてうちを出でて油断なく用事とのへはやかへりつつ 山辺 赤人
- 5 奥方に奉公するとも気をつけて万事はやきはしうも嬉しく 猿丸 大夫
- 6 傘さして行くとも人にゆき当るなそれが喧嘩のもととなりける 中納言家持
- 7 あまやかし育てあげたるその子こそ末のみすぎを知らぬものなり 安倍 仲麿
- 8 我が家をそりにしんだいしあぐればようみをもつと人はいふなり 喜撰 法師
- 9 花のした鼻をばたれてくるふ子はさぞやたわけとながめせしまに 小野 小町
- 10 これやこの使ひに行きて道寄りをせずにいそいではや帰りつつ 蝉 丸
- 11 わたくしの銭をこしらへ悪づかひ人にかくせど誰も知りつつ 参議 篁
- 12 有りあまる金とてむざと使ふなよしまづ第一福をとどめむ 僧正 遍昭
- 13 筑波嶺のむねよりいづるうそのかはこれ借錢の淵となりぬる 陽 成院

異種百人一首叢刊(四)

- 14 みすぎをば女なりとも第一に縫ひ針ごとをつねに覚えよ 河原左大臣
- 15 金銭を使ひすつるもたわけ者、食はずにためる人も馬鹿もの 光孝 天皇
- 16 誰が見ても悪うないのがよいのなりおのがよいとてよいのでもなし 中納言行平
- 17 智慧もなく情も知らぬ金持はしだいしだいに衰ふるなり 在原業平朝臣
- 18 すみし世にすぐなる心持つ人はむかふに祈る神ぞまもらむ 藤原敏行朝臣
- 19 何事も兄弟たちに従うて悪しきを捨てて善きを習へよ 伊 勢
- 20 わすれても親のほうをばあとにすな人まじはりもごをんとぞ思ふ 元良 親王
- 21 今こんというても帰るばくち宿悪き友をばわけいづるかな 素性 法師
- 22 不孝とは親にむかうて口答へ返辞おそきも不孝なるらむ 文屋 康秀
- 23 辻々で買ひ食ひするで大だわけ人がゆびさしわらひこそすれ 大江 千里
- 24 恋すてふ主ある女にててんごうけがにもするな人のくちぐち 菅 家
- 25 なにごとも親に孝行する人はくにかみにもまさるものかな 三条右大臣
- 26 おちうばで育てた子には油断すな親の恩をば知らぬものなり 貞信 公
- 27 にかかにかのうずものじやといはるるな人がにくめればそももあるらむ 中納言兼輔
- 28 宿なしに生れつく身はなけれどもはじめは酒と色と博奕 源宗于朝臣
- 29 こころなくなさけも知らぬ金持は二代つづかずさても気の毒 凡河内躬恒
- 30 あくたいは家業のためにならぬもの子持ちの親はことたしなめ 壬生 忠岑
- 31 朝起きてうがひ手水を使ひなば神や仏をいのりたまへよ 坂上 是則
- 32 わが役は心にいらぬ役なれど天のさくしやのさしづ是非なし 春道 列樹
- 33 人はただ親と主人と旦那寺わがうけにんを大切にせよ 紀 友 則
- 34 生れつくわが悪念を直さずに学問すれば身を害すもの 藤原 興風
- 35 人はただ師匠や親の恩をまだ知らざる人は犬におとらむ 紀 貫 之
- 36 なにごともとかく世間のあしきこと見るにつけても我をたしなめ 清原深養父
- 37 無学でも親がきびしく育つれば自然と親を大切にす 文屋 朝康
- 38 わすれても身をば大事ともつものぞおごりはその身毒と知るべし 右 近
- 39 えたること職を大事にきはめつつ芸能・遊山分にしたがへ 参議 等
- 40 しのぶれど色と酒とがこうじればのちには喧嘩口論となる 平 兼盛
- 41 てて親は叱るが嫌ひ母親の叱る高声とうざまにあひ 壬生 忠見
- 42 似合はざるけんぶつこのみ物まゐり家職忘るは貧のもとゐぞ 清原 元輔
- 43 ちあかずわが身のはてをあんじつつ正直慈悲に心持つべし 中納言敦忠

44 善悪の知恵はその身に生れつく身を知るため
にならふ学問 中納言朝忠

45 おもしろくはなせる人と見るならばめつたに
はだが許されもせず 謙徳公

46 行くところ行かぬ所をわきまへてながしり話
夜遊びをすな 曾根好忠

47 古へも今も君子の御心は理非を正してくにを
そしらず 惠慶法師

48 酒の気を借りてかけ出るおろか者酔ひがさむ
ればそぞろみがたつ 源重之

49 短かきや長きがあるぞおもしろき揃はぬでこ
そ浮世なりけり 大中臣能宣

50 流浪して世をすぎかねしそのときは近しき人
も遠ざかるなり 藤原義孝

51 仮初めに夫婦いさかひする人は仏神加護もう
すくなるべし 藤原実方朝臣

52 あけぬれば遊ぶものとは知りながらうそ気味
わるき内の不しゆびさ 藤原道信

53 難儀とて我身の上を語るなよいかたはけな
ものとかは知る 右大将道綱母

54 悪しとてそしり怨むなしうと親海山よりも深
く高けれ 儀同三司母

55 誰が身にも七つの癖はありと聞くいくたびも
身を省るべし 大納言公任

56 あらざらむ悪事をなせば必ずとせめくに逢つ
て身をはたすなり 和泉式部

57 召し使ふ年期ものをばいたはりててひどくつ
かへかはるわが子を 紫式部

58 堪忍は必ず人の為ならずつまるころは己が
身の為 大式三位

59 安らかにもの言ひならひかりそめに理窟がま
しく言葉遣ふな 赤染衛門

60 弟をあはれみ兄をうやまふもこれ孝行のひと
つなりけり 小式部内侍

61 いにしへの礼儀の道をならはずは鳥けだもの
におとるべきかな 伊勢大輔

62 振り上ぐる拳のつのをただひしげおのが心を
金錠として 清少納言

63 今はまだ心すなほに正直によこしまなきを人
といふなり 左京大夫道雅

64 人ごとをそしらば人もわがことをそしらむも
のととかくつつしめ 権中納言定頼

65 うらみわび兄弟なかも敵となる欲はじやけん
のつるぎなりけり 相摸

66 物をこひ門にたたずむものあらば分相応に施
しをせよ 前大僧正行尊

67 春の花秋の紅葉も時を知る人の子として孝行
を知れ 周防内侍

68 心にも知りつついのる身の悪事その行く末を
地獄とはいふ 三条院

69 あしきとてただ一すぢに捨てるなよ渋柿を見
よ甘ぼしとなる 能因法師

70 くち答へする所をばとまり舟いかりをしのお
うちにしづめて 良暹法師

71 夕されば門にすぢめがうかれめのはだみせか
けて恋風ぞ吹く 大納言径信

72 おとなしくただ堪忍をだいに人をそねまず
正直にせよ 祐子内親玉家紀伊

73 高声で人ごといはばわが耳へ障子さすべしそ
の座立ち去れ 前中納言匡房

74 そつとせよ人の心は井戸の水かきまはしては
すべて泥水 源俊頼朝臣

75 つくりおきし田畑の露をいのちにてあはれ今
年の秋をとりこむ 藤原基俊

76 悪ざれのはては喧嘩となるものぞ程よく人に
戯れぞき 法性寺入道前関白太政大臣

77 せいにいれみすぎ大事にかせぐ人家は榮えて
富めるなりけり 崇徳院

78 ももいぢにかよふやせどのなくこゑを聞いて
ねぎめに親の恩しる 源兼昌

79 秋風と身にしむ親のをしへをばよくわきまへ
てよき人になれ 左京大夫頭輔

80 長からむ此の世もしらさうかうかと世わたる
人の末はほうさま 待賢門院堀河

81 時鳥なくこゑよりも聞きたきはまことの道を
かたる世の人 後徳大寺左大臣

82 思ひしるさても命はものたねようきが中にも
子の出世みて 道因法師

83 よの中よめはわが子の聞の伽仲さへよくば
ほかはこふせう 皇太后宮大夫俊成

84 人なみにはらをたてるは知恵いらざりやうけ
んするがほんの分別 藤原清輔朝臣

85 夜もすがら借錢のこと思ひ出てねやのひまさ
へ苦しかりける 俊恵法師

86 歎くまじ人の言葉の尻馬に乗って口惜しきわ
がたわけかな 西行法師

87 むらのある世の中なりと知るならば情を人の
ためと思ふな 寂蓮法師

88 なが生きはただ働くにしくはなし流るる水の
くさらぬを見よ 皇嘉門院別当

89 正直に家業大事に御はつとを守る心がすぐに
孝行 式子内親王

90 身の欲をいかに祈るといふとても神のこころ
になどかかなはむ 殷富門院別当

91 若後家の泣くや霜夜のさむしろに子供思へば
ひとり寝をして 後京極摂政前太政大臣

92 われなからさけ□は見えね泥まぶれこけまは
るので乾くまもなし 二条院讃岐

93 よき人と知らば敬ひ親しみてその正しきをな
らふべきなり 鎌倉右大臣

94 身の程を知りてくらせばながらむ分にすく
ればはやくおとろふ 参議 雅経

95 おのれよく正して人に交はらばたとへあしき
もさりきとひなし 前大僧正慈円

96 恥ぢよただ人の悪しきは我が悪しき身を慎み
とともに交はれ 入道前太政大臣

97 来ぬ人を待つ夜は裏のかけがねをはずしてお
いて身もごごへつつ 権中納言定家

98 髪がたちつくるは人の礼なれどつくりすぐる
はいやらしきかな 従二位家隆

99 人もよし我もよかれと心得よよみかきわざを
つね思ふ身は 後鳥羽院

100 もも引や脚胖でわたるいとなみも親孝行のま
ことなるべし 順徳院

〔解説〕 「男女教訓百人一首宝蔵」(外題)
中本袋綴刊本。表紙桜の絵に外題を出す。六丁
の小冊。刊記に、干時天明七年未正月吉日、遊
樂堂版、とあり。序跋なし。撰者不詳。小倉百
人一首のもじりの形をとつた道歌とも云える。
いかにも庶民の間に行われたものらしく、市井

の町人の道德感があらわれている。全体に云つ
て、孝を説いた歌が多い。

不孝とは親にむかうて口答へ、返事おそき
も不孝なるらん

なにごとも親に孝行する人はくにのかみに
もまさるものかな

人はただ親と主人と且那寺わが受け人を大
切にせよ

弟をあはれみ兄をうやまふもこれ孝行のひ
とつなりけり

春の花秋の紅葉も時を知る人の子として孝
行を知れ

正直に家業大事に御はつとをまもるこころ
がすぐに孝行

もも引きや脚胖でわたるいとなみも親孝行
のまことなるべし

子育てには
無学でも親がきびしく育つれば自然と親を
大切にす

甘やかし育てあげたるその子こそ末のみす
ぎを知らぬものなり

おぢうばで育てた子には油断すな親の恩を
ば知らぬものなり

は、「年寄りつ子三文安」といわれたもの。金
銭については

わたくしの銭をこしらへ悪づかひ人にかく
せど誰も知りつつ

あり余る金とてむざと使ふなよしまつ第一
福をとどめむ

つくばねのむねより出づるうそのかはこれ

借銭の淵となりぬる
金銭を使ひすつるもたわけ者食はずにため
る人も馬鹿もの

などと、いかにも庶民への教えがある。

そつとせよ人の心は井戸の水かきまはして
はすべて泥水

長生きはただ働くにしくはなし流るる水の
腐らぬをみよ

などは、身近い比喻であるが、
若後家の泣くや霜夜のさむしろに子供思へ
ばひとりかもねん

来ぬ人を待つ夜は裏の掛金をはづしておい
て身もごごえつつ

は何の教訓の歌であらう。

しのぶれど色と酒とがこうじればのちには
けんか口論となる

宿なしに生れつく身はなけれどもはじめは
酒と色とばくえき

は「忍ふれど色に出にけり」「山ざとは冬そさ
ひしきまさりける」のもじりとはいうけとりがた
く、ほとんど全部こう云つたものである。しの
ぶれどだけでも出しているのはまだましであり
宿なしには影もかたちもない。山里の「や」だ
けだ。西行と寂蓮でも同様である。

歎くまじ人の言葉のしり馬に乗って口惜し
きわがたわけかな

むらのある世の中なりと知るならば情を入
の為と思ふな

西行のは「歎けとて」「わが涙かな」が語呂を
あわせている。寂蓮は「むら」だけである。

西行のは「歎けとて」「わが涙かな」が語呂を
あわせている。寂蓮は「むら」だけである。

百人一首地口画手本

松斎芳宗画
嘉永五(一八五三)刊

- 1 ありがたきてんちのめぐみ刈る稲にわが衣手
はつゆにぬれつつ 天智 天皇
- 2 春すぎて夏来にけらし白しぼりの浴衣はずて
ふあだなかみさん 持統 天皇
- 3 あしびきの山を越えてもかよふなり長々し夜
はひとりねられず 柿本 人麿
- 4 田子の浦に出来たる塩はしろたへの富士の高
嶺のゆきの山もり 山部 赤人
- 5 奥山にもみぢ見の客なま酔ひの声きくときぞ
秋もをかしき 猿丸 大夫
- 6 行灯の消えかかりたる奥座敷しろきを見れば
夜ぞふけにける 中納言家持
- 7 朝つばら深酒みればかすかなりおさかな玉に
とちしつみいれ 安倍 仲麿
- 8 茶ずきには喜撰ほうじてもてなしに世をうぢ
山と人はいふなり 喜撰 法師
- 9 はなのあなはうづぎにけりないたづらにわさ
びよく利きかかせてしまに 小野 小町
- 10 これやこの行くもかへるも忘れては何にも知
らぬ大酒のすき 蝉 丸
- 11 おさかなはやすしまかけて何なりと人にはつ
げよあまのつり舟 小野 篁
- 12 行きちがふ屋根舟そばへ吹きつけよをとめの
姿しばしとどめむ 僧正 遍昭
- 13 色男は女のおちるみなな川恋ぞつもりて淵と
なりぬる 陽 成院
- 14 陸奥の信夫のいとをぞんざいな乱れそめにし
われならなくに 河原左大臣
- 15 親のためかせぎにいでてわたをつむわが衣手
に雪はふりつつ 光孝 天皇
- 16 立ちわかれ田舎の山の峯におひてまつとし聞
かば今かへり来む 中納言行平
- 17 金魚鉢無駄なついえもたつ田川からくれなる
の水くくるとは 在原業平朝臣
- 18 かんたんの宿の枕による客はゆめのかよひち
人のよくばり 藤原敏行朝臣
- 19 不足をばいはぬいるなる源左衛門あはでこの
よをすぐしてよとや 伊 勢
- 20 安売はみなまたおなじかまほこやみをつぶし
てやあはんとぞ思ふ 元良 親王
- 21 なんどきとたづねかねの音よるのたび有明の
月をまち出つるかな 素性 法師
- 22 文字わけに文屋の歌としらるればむべ山風を
あらしといふらむ 文屋 康秀
- 23 うつりかへちごとゆかたぞかなしけれわがみ
ひとつの秋にはあらねど 大江 千里
- 24 このたびはぬさもとり得ず手むけ山おやじの
留守にかみさんまにまに 菅 家
- 25 たたみざん大坂屋にて待つ客の人にしられで
くるよしもかな 三条右大臣
- 26 花ぞとも峯の梢の眺めありいま一たびのみ幸
待たなん 貞 信公
- 27 しらぬまに芝居のうはさ聞くむすめいつ見き
とてか恋しがらん 中納言兼輔
- 28 山里へひとり雪見の風流は人目も草もかれぬ
とおもへば 源宗千朝臣
- 29 所書におおばやおらんはつだよりゆきまどは
せるしれにくいたな 凡河内躬恒
- 30 言ひがかり痴話あらそひもわかれにはあかつ
きばかりうきものはなし 壬生 忠岑
- 31 さくら花咲きこぼると見まがうて吉野の里
に降れる白雪 坂上 是則
- 32 みうらやの高尾がかけたる打掛は流れもあへ
ぬ紅葉なりけり 春道 列樹
- 33 金持のひとりのどけき春の日にしづ心なく花
のちるらむ 紀 友則
- 34 源蔵がしる人にせんかへり忠松王むかしの友
ならなくに 藤原 興風
- 35 人はいざ小野の小町に年は寄れど花ぞ昔の香
にほひける 紀 貫之
- 36 夏の夜はまだよひながらあよびゆくこよひい
づこに月やどるらむ 清原深養父
- 37 棟上げに風の吹きとぶ餅まきはつらぬきとめ
ぬ玉ぞちりける 文屋 朝康
- 38 ふぐ汁や鯛もあればとあとへよく人のいのち
のをしくもあるかな 右 近
- 39 大入の芝居のあとに立見せばあまりてなどか
人の恋しき 参議 等
- 40 たいくつで何を所在もなげ首にもものや思ふと
人のとふまで 平 兼盛
- 41 はかりじまよきべつ甲の櫛かんざし人知れず
こそ思ひそめしか 壬生 忠見
- 42 吹きみちて今を桜の白妙に末の松山波こさじ
とは 清原 元輔
- 43 なにごともぜいたくになりくらぶれば昔は物
を思はざりけり 中納言敦忠

- 44 逢うたれど捨てし我が子と刈萱の人をも身を
もうらみざりまし 中納言朝忠
- 45 哀ともいふべき八百屋お七さへ身のいたづら
になりぬべきかな 謙 徳 公
- 46 清姫がわたしを舟へかぶりふり行方もしらぬ
恋の道かな 曾根 好忠
- 47 おのづから長夜やはらもさびしきに人こそ見
えね秋は来にけり 惠慶 法師
- 48 はちをいため胸うつ下女のおのれのみくだけ
てものを思ふ頃かな 源 重 之
- 49 子どもらがほしき螢の夜はもえて昼は消えつ
つものをこそ思へ 大中臣能宣
- 50 親のため鉢の桜のさかりさへ長くもがなと思
ひけるかな 藤原 義孝
- 51 たくとだに宮本武蔵風呂の中さしもしらじな
もゆる思ひを 藤原実方朝臣
- 52 芝居行きに留守する下女が見おくりて猶うら
めしき朝ほらけかな 藤原道信朝臣
- 53 花火をばもらうて日ぐれ待つ子供いかに久し
きものとかは知る 右大将道綱母
- 54 蒲焼になるてふざるの鰻さへけふをかぎりの
いのちもがな 儀同三司母
- 55 かうらいや幡随院長兵衛を質におき名こそ流
れてなほ聞えけり 大納言公任
- 56 葛の葉のうたてや子にもわかれぎは今一度の
逢ふこともがな 和泉 式部
- 57 提灯も消えてどこともわかぬまに雲かくれに
し夜半の月かな 紫 式 部
- 58 ゆきあうてよう似たものを思ひ出しいでそよ
人を忘れやはする 大式 三位
- 59 酒やめてねなましモシへよもふける傾くまで
の月をみしかな 赤染 衛門
- 60 恋ひこがれ思ひのたけの返事さへまだふみも
みず天の橋立 小式部内侍
- 61 植木屋がはこびてうゑし八重桜けふこの家に
にほひぬるかな 伊勢 大輔
- 62 てつが嶽いな川ほどに力なく世に大坂の関は
ゆるさじ 清 少納言
- 63 手紙にはむしんの筋を書くばかり人づてなら
でいふよしもがな 左京大夫道雅
- 64 高綱は宇治川の先陣われなりとあらはれわた
る瀬々のあじろ木 権中納言定頼
- 65 こむらさき比翼連理の契より恋にくちなん名
こそをしけれ 相 摸
- 66 よしつねのほまれをさきに鞍馬山花よりほか
にする人もなし 前大僧正行尊
- 67 あふこともおさん茂平がかどちがひかひなく
立たむ名こそをしけれ 周防 内侍
- 68 提灯もなくて思はずかけ出し恋しかるべき夜
半の月かな 三条 院
- 69 しんぞうのうちそろうたる舟遊山たつたの川
のにしきなりけり 能因 法師
- 70 隣でも向うでもみな寂しさういづこも同じ秋
の夕ぐれ 良暹 法師
- 71 里遠くきるものさへもひとつ家のあしのまる
やに秋風ぞ吹く 大納言経信
- 72 潮干狩する新造のあななみにかけしや袖のぬ
れもこそすれ 祐子内親王家紀伊
- 73 ながめあるけしきをささがひきつつみ外山の
霞たたずもあらなん 前中納言匡房
- 74 何時までもおきたき花をちらちらはげし
かぜとはいのらぬものを 源俊頼朝臣
- 75 巢鴨染井菊の盛りもなごりにてあはれことし
の秋もいぬめり 藤原 基俊
- 76 天雲は去った峠の朝げしき雲居にまがふ沖つ
しら波 法性寺入道前関白太政大臣
- 77 ちがふともどびんのふたは残しおけわれても
すゑにあはんとぞ思ふ 崇 徳 院
- 78 ちどりよりちろりと酒を思ひ出しいく夜ねざ
めをすまのせきもり 源 兼昌
- 79 うれしやと思へば心すむ空にもれいづる月の
かげのさやけき 右京大夫頭輔
- 80 仕立屋の子供がひとをませかへしみだれてけ
さはものをこそ思へや 待賢門院堀川
- 81 待つ夜半をあだに更かしてうはのそらただ有
明の月ぞのこれる 後徳大寺左大臣
- 82 くすの木がほかに用事のなきおとこうきにた
へぬは涙なりけり 道因 法師
- 83 捨てはてし憂き世にまたもつまこひし山のお
くにも鹿ぞなくなる 皇太后宮大夫俊成
- 84 すつぱりと思ひきつたる黒髪のうちと見し世
ぞ今は恋しき 藤原清輔朝臣
- 85 なにゆゑぞふくれて床にただひとり聞のひま
さへつれなかりけり 俊惠 法師
- 86 からし酢のきいたに鼻もとぶばかりかこちが
ほなるわが涙かな 西行 法師
- 87 一葉づつ散らせる風のさびしさに霧立ちのぼ
る秋のゆふぐれ 寂蓮 法師
- 88 久松とお染は倉の内と外身をつくしてや恋ひ
わたるべき 皇嘉門院別当

89 放し亀いつまでいにとつるされてしのぶることのよわりもぞする 式子内親王

90 めくらじまふるいほどにはとくがありぬれにぞぬれし色は変らじ 殷富門院大夫

91 こがれてもおくみに無縁法界坊ころも片しきひとりかもねん 後京極摂政前太政大臣

92 女湯がいいとぞ湯屋の番頭は人こそしらねかわくまもなし 二条院讃岐

93 世の中の稼業ながらもあやうきはあまの小舟のつなでかなしも 鎌倉右大臣

94 入かへをいそげよき人冬仕度ふるさと寒くころもうつなり 参議 雅経

95 舟慶はいくさの中の大工にてわが立つ袖にすみぞめの袖 前大僧正慈円

96 子供らが遊ぶ道中すごろくにふりゆくものはわがみなりけり 入道前太政大臣

97 客人にくはせたいをば夕河岸に焼くやもしほの身もこがれつつ 権中納言定家

98 くるしかりわたぬくままにひとへのみそぎぞ夏のしるしなりける 正三位家隆

99 きれあぢをみする青砥のまつりごと世を思ふゆゑもの思ふ身は 後鳥羽院

100 浦島が立ち帰り来る故里はなほあまりある昔なりけり 順徳院

〔解説〕 百人一首地口絵手本、武者絵表紙袋綴中本刊一冊。表紙は武者二人戦う凶色刷。表題「地口絵手本」をかこんで、左右にわかれて「百人」「一首」とあり、綴目の所に「松斎芳宗画」とある。見返しに「百人一首地口絵手本」絵馬(狐と宝珠)と梅の枝を配した画の右

わきに「神田松下町三丁目、伊勢屋忠兵衛板」とある。第一丁表に序あり。

乍憚口上やら序文やらしれざることを申し上げます。此頃は種々の妙作あまた出て幼童のもてあそびとなるもの多し。拙子戯文をこのみて何くれとなく書きつづりて、すきの酒のあたひを儲く。ここに板元いせ屋の親方百人一首をとりにて狂歌によむべしといふ。吾つら

つら思ふに、斯かる秀吟を戯歌によまむこと其の恐れなきにあらず、又自他のわからざる歌もできるならん、是等は許し給へと、なま酔ひの筆をとりたり。嘉永五年六月

とある。著者は売文の某。概ね小倉百人一首の下句をそのまま用いて狂歌とした。もともと地口絵の手本を主として編まれた。下句をそのまま用いないもの

春過ぎて夏来にけらし白しぼり浴衣干すてふあだなかみさん 持续 天皇

田子浦に出来たる塩は白妙の富士の高ねの雪の山もり 山辺 赤人

奥山に紅葉見る客なま酔ひの声きくときぞ秋もをかしき 猿丸 太夫

あしびぎの山を越えてもかよふなり長々し夜はひとりねられず 柿本 人麿

朝つばら深酒みればかすかなりおさかな玉にとぢしつみいれ 阿倍 仲麿

鼻の穴はうづきにけりないたづらに山葵よく利きかかせてしまに 小野 小町

これやこの行くも帰るも忘れては何にも知らぬ大酒のすき 蝉 丸

かんだんの宿の枕による客は夢の通ひ路人のよくばり 藤原敏行朝臣

安売はみなまた同じかまぼこやみをつぶしてやあはむとぞ思ふ 元良 親王

この度はぬさも取りあへず手向山親父の留守にかみさんまにまに 菅 家

所書きにおおばやおらむ初便り行きまどはせしれにくいたな 凡河内躬恒

源蔵が知る人にせん返り忠松王むかしの友ならなくに 藤原 興風

夏の夜はまだよひながらあよびゆく今宵いつこに月やどるらむ 清原深養父

植木屋かはこびて植ゑし八重桜けふこの家にはひぬるかな 伊勢 大輔

何時までもおきたき花をちらちらはげしかぜとは祈らぬものを 源俊頼朝臣

位いなものである。それらもわづかにもちつた程度である地口あんどに絵を歌を書いたものが、小倉百人一首につながるところに庶民性がある。

私がまだ少年の頃田舎の村の祭礼には、きまつて、地口あんどが並んでいて、それに灯が入って、それぞれのあんどには、画入りで歌や俳句か書かれていた。次々に読んでゆくのもたのしいものであった。これは、村にそうした画や、俳句のうまい人があつて、年々それを画いては、奉納するものであった。これはそうしたものの手引きとなるように編まれたもので、各略画が書かれている。見ていくにつれて、幼い頃の郷愁もわくのである。